

2024 年度 日本語教育実習報告書

東京女子大学

日本語教員養成課程

はじめに

学生の皆さんは2年次より日本語教育の学びを歩み始め、今年度、実習に臨みました。その歩みと学びがこの報告書に込められていることでしょう。日本語教員養成課程を修了する皆さんの中で、日本語教師になる人は実はあまり多くはないかもしれません。しかしながら、この課程を通して培ってきた伝える力、受け止める力、協働する力はどのような社会生活を過ごしていくなかでも、必ず役立つものですし、よりよい社会づくりのためにも生かされていくと確信しています。

日本語教育実習を支えてくださったすべての皆さんに心よりお礼を申し上げます。学外実習でお世話になりました各日本語学校の先生方、事務スタッフ、学生の皆さん、本当にありがとうございました。今年度の日本語教育実習は、学内実習を久しぶりに対面で実施することができました。学内実習のために本学まで足を運んで参加してくれた皆さん、参加者募集にお力添えいただきました関係者の皆さん、本当に感謝しています。今後ともお力添えをいただきますようお願い申し上げます。

皆さんに支えられながら、今後とも本学の日本語教員養成課程を継続していきたいと強く願っております。

2025年2月吉日

日本語教員養成課程運営委員長
日本語教育実習担当
松尾慎

日本語教育実習 講師
吉本恵子

◇2024 年度 日本語教育実習報告書◇

～目次～

はじめに

日本語教育実習の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

「日本語教育実習」全体の流れ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

実習報告：学内実習（フィールド実践 A）

牛タン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

てんぷらうどん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

実習報告：学外実習（フィールド実践 B・C）

2024 年度 学外実習受入日本語教育機関・・・・・・・・・・・・・・・・ 43

インターカルト日本語学校・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

カイ日本語スクール・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

新宿日本語学校・・・・・・・・・・・・・・・・ 73

実習を振り返って - 個人レポート概要

学内実習（フィールド実践 A）・・・・・・・・・・・・・・・・ 91

学外実習（フィールド実践 B・C）・・・・・・・・・・・・・・・・ 95

日本語教育実習の概要

1. 日本語教育実習の目的

日本語教育の実際は、多様である。日本国内においても、日本語学校や大学等教育機関として長期的に日本語教育を行う場合と、中国帰国者や技術研修生等に対して短期間集中的に初期指導を行う場合、また地域の日本語教室のように地域を基盤として行われる場合とでは、日本語教育の目的や教育内容・方法等に大きな違いがある。また、たとえば日本語学校であっても、学習者の背景や、教育機関の設置形態、教育設備等の環境などさまざまな違いがある。国内と海外では、社会の言語環境など学習者や日本語教育の場を取り巻く環境も大きく異なる。そうした多様な現場において、教える立場に立つ者に求められることも当然同じではない。

この日本語教育実習では、大学を卒業した後、どのような日本語教育の場に関わるとしても、そこでの日本語教育が何のためにあるのかを考え、学習者や学習の場を取り巻く環境をよく見、そのうえで自分がどのような役割を担い何をすべきかを判断できる力をつけることを目標とする。

2. 日本語教育実習の構成

「日本語教育実習」は、以下の3つの部分で構成される。(図「日本語教育実習全体の流れ」参照)

① 事前準備

講義等による指導を受けると同時に、学習者のニーズや日本語教育の目的、学習環境などに関して事前に情報収集を行い、自分が関わる日本語教育の位置づけを理解し、自分の役割の明確化・実習の目標設定を行う。

② フィールド実践

実際に、日本語教育の現場で学習支援の活動を行う。その際、目標設定に合わせて、振り返りのためのデータを収集する。

③ 振り返り

自分自身の目標に照らして、フィールド実践がどうであったかを収集したデータの分析をふまえて振り返る。

学習者と直接向き合って学習支援を行う「フィールド実践」を中心に、事前に自分が関わる学習の場についての情報を得る「事前準備」を十分に行い、実践での各自の目標を設定すること、また実際に自分が行った学習支援活動について、自分自身の意識、学習者の反応、指導担当の先生をはじめとする受け入れ期間の人々からのフィードバックなどを踏まえて「振り返り」を行う、これら3つの部分全体をもって「日本語教育実習」とする。

「フィールド実践」は、以下のA～Cの3つの形態で実施した。

A. スクール・シミュレーション型 (学内での実践)

学内に学習者を集めて5日間の日本語コースを開設する。コース設計から、学習者の募集・選考、教案作成、授業実施まで、全てを学生が自主的に運営して行う。

B. 短期集中型（学外での実践）

学外の日本語教育機関において2週間程度、集中して実践を行う。授業での役割や支援の内容は、担当教師のコース計画に従う。

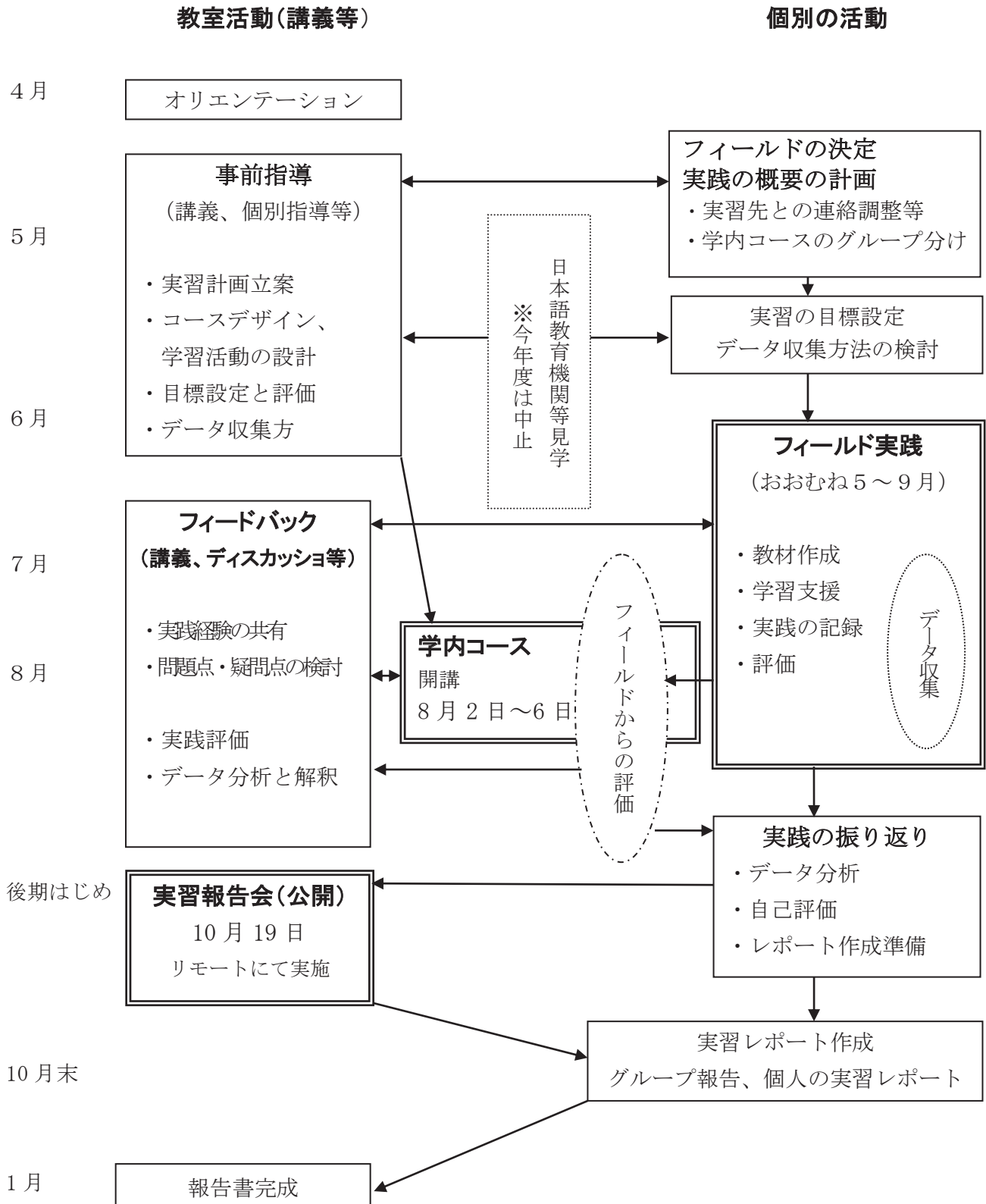
C. 長期継続型（学外での実践）

学外の日本語教育機関で、一つのクラスに一定期間（2～3ヶ月程度）継続的に参加する。いわばティーチングアシスタントとして、クラスを担当する教師と共に、授業に参加し、学習支援を行う。授業での役割や支援の内容は、担当教師のコース計画に従う。

フィールド実践と並行して行われる毎週の授業、あるいは実践終了後の実習報告会では、それぞれの機関での実践の経験をお互いに共有することで、自分が関わる教育現場（フィールド）の特性をより明確に理解し、そこでの活動の一つ一つが、何のために、なぜそのようなやり方で行われたのかを考える契機となることを促進する。それぞれの異なる経験を共有することによって、自分自身の経験をより広く深いものにすることは、教師に求められる重要な行動でもあるからである。

これらの過程を経て、実習についての報告をグループごと（学内実習はコースごと、学外実習は実習を行った機関ごと）に作成し、各個人の振り返りをレポートにまとめた。

【実習全体の流れ】



2024年度「日本語教育実習」講義スケジュール

担当： 松尾慎
吉本恵子

講義 全15回

回	月日	内容	
1	4月12日	オリエンテーション コース概要説明	
2	4月19日 吉本先生	講師自己紹介 ワークショップ	
3	4月26日 松尾先生	コースデザイン	
4	5月10日 松尾先生	教材分析 —授業の流れ—	
5	5月17日 松尾先生	学生による実践①(初級日本語の導入・基礎練習)	
6	5月24日 松尾先生	学生による実践②(初級日本語の導入・基礎練習)	
7	5月31日 松尾先生	学生による実践③(初級日本語の導入・基礎練習)	
8	6月7日 吉本先生	学生による実践④ —初めての授業の自己紹介—	
9	6月14日 吉本先生	学生による実践⑤ —カレンダーを用いた授業①—	
10	6月21日	学生による実践⑥ —カレンダーを用いた授業②—	学内実習準備 6/21(金)14時ポスター 案〆切 6/25(火)14時ポスター 最終原稿〆切、印刷 6/28(金)発送
11	6月28日	交流会に向けての準備	
12	7月5日	学外実習班	学内実習班
		タイの高校で日本語を学んでいる生徒たちとの交流会	
		学外実習進捗状況報告と検討	学内実習準備
		学外実習進捗状況報告と検討	コース設計
		学外実習進捗状況報告と検討	5日間の大枠検討
15	7月26日	まとめ	授業案作成

・学内実習期間…8/2(金)3(土)4(日)5(月)6(火)※初日(8/2)のみオンラインで実施

・実習報告会(公開)…10月19(土)9:00~12:00 オンライン開催

◆実習報告◆

学内実習
(フィールド実践 A)

①コース さっかく たの 錯覚を楽しもう

さっかく たの
錯覚を楽しもう！

だいば めいきゅうかん い
お台場のトリックアート迷宮館に行きます！

にちじょうかいわていど
レベル：日常会話程度

ぼしゅうにんずう にん
募集人数：10人

さんかひ めいきゅうかんにゅうじょうりょう えん
参加費：トリックアート迷宮館入場料(1200円)+
こうつうひ、ちゅうしょくだい
交通費、昼食代

じぜんせつめいかい
事前説明会
7月13日・17日・22日
17:30~19:00
かいさい
オンラインで開催します。

もう こ
申し込みはこちら！→
しょうさい
詳細はメールでお知らせします。

おもしろい しゃしんと
面白い写真を撮ろう！





②コース にほん なつ し 日本の夏を知ろう

にほん
日本の夏を知ろう！

かかん
5日間ですること

にほん なつ べんきょう
日本の夏について勉強しよう！

せかい まつ はな
世界のお祭りについて話そう！

にほん ぶんか まつ し
日本の文化をお祭りから知ろう！

なかの ぼんおど い
中野の盆踊りに行こう！

おも で つく
思い出のアルバムを作ろう！

おうぼ ひと
応募できる人

- レベル：初級
- 年齢：大学生以上
- 5日間参加できる人
- 説明会に1日参加できる人
- パソコンかスマートフォンを持っている人

せつめいかい にっぺい
説明会の日程

がつ にち にち にち か
7月21日(日)・23日(火)

にち すい にち か
24日(水)・30日(火)

19:00~19:30(日本時間)

にちじ
日時

きかん
期間：8月2、3、4、5、6日

ばしょ
場所：オンライン(8月2日)

とうきょうじょしだいがく がつ みつか わいか
東京女子大学(8月3日~6日)

じかん
時間：9:30~12:30(日本時間)

がつよっか にち
8月4日(日)は13:30~16:00

ももの あつ ま ところ
持ち物：暑さに負けない心！

なつ たの ところ
夏を楽しむ心！

ひょう こうつう ひ
費用：交通費

まつ つか かね えん えん
お祭りで使うお金(0円~1000円)

もう こ きげん
申し込みの期限

がつ にち もくようび
7月25日 木曜日

にほんじかん
18:00(日本時間)まで

もう こ ほうほう
申し込み方法

①QRコードを読み取る →

②Googleフォームから申し込む




◆ 牛タン ◆
「錯覚を楽しく学ぼう」

内田閑

佐野茉莉香

篠原佑舞

竹内美玖

福本乃愛

1. テーマ

「錯覚を楽しく学ぼう」

2. 対象レベル

初級、中級～

3. 5日間の目標

目で見たものを日本語でいうことが出来る。

錯覚の面白さを日本語で表現できるようになる。日本語学習の面白さを知ってもらう。

4. 学習者の概要

年齢	性別	出身国	所属	レベル	備考
28	女性	アメリカ	学生	上級	
20	男性	中国	学生	上級	1～3日目のみ参加
27	女性	中国	学生	上級	1日目のみ参加
23	男性	中国	学生	上級	
30	女性	チリ	学生	初級	1日目のみ参加
28	男性	チリ	学生	初級	1日目のみ参加
17	男性	日本	学生	上級	4日目欠席
17	男性	インド	学生	上級	4日目欠席
17	男性	インド	学生	上級	1～3日目のみ参加

5. 実施までのスケジュール

6月	<ul style="list-style-type: none">・チーム分け・チーム名、役割決定・共有アカウント作成
7月	<ul style="list-style-type: none">・ポスター完成・参加者の募集(チラシの作成、配布) 19(金) JET 日本語学校 * 24(水) イーストウエスト日本語学校 * 25(木) 新宿日本語学校 * 30(火) LTC 友の会-杉並区の日本語教室 ※ *先生にご紹介いただき、学生にチラシ配布したいという旨のメールを送った。 ※LTC 友の会のみ個人的にアポイントメントをとった。メンバーで行ける人を募り、短期間で行った。授業の一部を説明にあててくださる学校もあり、短時間で要点を説明できるよう、準備を万全にして訪問した。

	<ul style="list-style-type: none"> ・説明会の実施 ・教案作成
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・教案完成 ・実習 8/2(金)~8/6(火)
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・実習報告会 19(土)9:00~11:30 @zoom ・個人レポート、実習報告書の提出 31(木)〆切

6. 5日間の概要

1日目	<ul style="list-style-type: none"> ・メンバーのことを知る ・錯覚の導入、錯覚の種類を紹介
2日目	<ul style="list-style-type: none"> ・日常にある錯覚について紹介 ・錯覚を作る工作+文型
3日目	<ul style="list-style-type: none"> ・東京トリックアート迷宮館の見学 ・見学後、残れる学習者と東女生と一緒に昼食
4日目	<ul style="list-style-type: none"> ・東京トリックアート迷宮館の振り返り ・錯覚について体感する
5日目	<ul style="list-style-type: none"> ・錯覚うちわ作りとうちわ発表会 ・アルバム作成 ・表彰式(感謝状の授与、メダルの贈呈、トリックアート迷宮館で購入したポストカードのプレゼント)

7. 5日間の活動内容

< 1日目 2024年8月2日(金) >

目標：みんなのことや錯覚について知る

時間	活動内容	備考
9:30-9:45	<p>【挨拶・自己紹介(15分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初に ZOOM の使い方を説明する ・自分たちは自己紹介の PPT をつくる <p>→1人1分程度で発表、学習者へ問いかけも適宜行いながら自己紹介を行う(それぞれにコメント、質問をしていく)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習者には、名前、出身、いつ日本へ来たか、好きな〇〇を聞く <p>→発表する項目のスライドを出しておく</p>	<p>進行：内田</p> <p>【使用道具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PPT

	<p>例)</p> <p>T:〇〇さんの出身はどちらですか??</p> <p>G:〇〇です</p> <p>T:〇〇さん、〇〇さんにいつ日本に来たか聞いてみましょう</p> <p>・全員の自己紹介が終わった後に Zoom の名前を「呼んでほしい名前」に変えるようにアナウンス</p>	
9:45-9:55	<p>【5日間の流れの説明と目標(10分)】</p> <p>・5日間の目的:目で見たものを日本語でいうことが出来る。錯覚の面白さを日本語で表現できるようになる。日本語学習の面白さを知ってもらおう。</p> <p>・流れの説明</p> <p>・目標(目的を達成するために何をしたいか)を立てて発表</p> <p>・学習者の目標も考えてもらう</p> <p>今日の流れの説明</p>	<p>進行:篠原</p> <p>【使用道具】</p> <p>・PPT</p>
9:55-10:05	<p>【休憩(10分)】</p>	
10:05-10:35	<p>【アイスブレイク(30分)】</p> <p>・挙手制の共通点さがし(全体)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨日勉強した人 ・朝ご飯食べた人 ・英語話せる人 ・東京に住んでいる人 ・夏、何をしたいですか ・アニメが好きの人 <p>皆さんに聞きたいことを考えてみましょう!</p>	<p>進行</p> <p>篠原:入り～勉強</p> <p>内田:朝ご飯～英語</p> <p>福本:東京～終わり</p> <p>【使用道具】</p> <p>・PPT</p>
10:35-	<p>【休憩(10分)】</p>	

10:45		
10:45- 11:05	<p>【 錯覚の説明(20分)】</p> <p>錯覚の導入(20分)</p> <p>沢山の錯覚の画像で錯覚をイメージできるようにする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ トイレットペーパーのマグカップ ・ ドーナツのヘッドフォン <p>・ 入から人を探す →この漢字知っていますか人 入 T:いくつあるか数えてください T:〇〇さん、いくつありましたか？ T:難しかったですか？人と入が同じ文字に見えますね</p> <p>・ 動く画像を3枚見せて、錯覚についての理解を促す(3分)</p>	<p>進行：佐野・竹内</p> <p>【使用道具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ PPT
	<p>錯覚とは何か定義を伝える(3分)</p> <p>錯覚=本当とは違うものに見えたり、感じたりすること</p>	<p>進行：佐野</p> <p>【使用道具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ PPT
11:05- 11:30	<p>錯覚の種類を紹介(25分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 比較を使う錯覚 「～は～より〇〇」「～と～は同じ」 ・ 2本の線を比べてどちらが長いのかを学習者に質問する(導入) ・ バームクーヘン型(実践) ・ 象とネズミ(実践) ・ 2個のケーキ(実践) <p>・ 「～に見える」みんなの日本語21課</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ウサギアヒル(導入) ・ 目か魚か(実践) ・ ルビンの壺(実践) ・ 少女と老婆(実践) 	<p>進行：篠原</p> <p>【使用道具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ PPT

	・「これは何に見えますか」 →「～に見えます」(学習者同士でも)	
11:30- 11:40	【休憩(10分)】 * 新宿日本語学校の生徒とはここでお別れ	休憩中に【明日の確認】
11:40- 11:50	【明日の確認(10分)】 ・東京女子大学への行き方 ・持ち物(お金)の確認 ・当日の緊急連絡先	進行：福本 【使用道具】 ・PPT
11:50- 12:00	【終わりの挨拶(10分)】 ・感想(型を作る)	進行：福本 【使用道具】 ・PPT

【良かった点】

- ・時間が巻いてしまったときに Zoom の機能や電話を使いながら臨機応変に対応できた。
- ・学習者の方々全員に均等に話を振ることが出来た。

【改善点】

- ・時間配分がうまくできておらず大幅に時間を巻いてしまった。
- ・東女生から学習者への一方的な質問になることが多かった。

< 2日目 2024年8月3日(土)>

目標：錯覚についての知識を蓄える、表現できるようになる

時間	活動内容	備考
9:30-9:40	【挨拶(10分)】 ・名札作り(机の上に設置する用) ・前日の振り返り(軽く、どんなことをしましたか?と聞く) 錯覚の定義の確認 →PPT を使用し確認 ・今日の流れの説明 軽い題名とタイムスケジュール	進行：篠原
9:40-10:10	【アイスブレイク(30分)】	進行：①篠原②内田、福本

	<p>①体でクイズ 2択のクイズを出す(4問) 実際に動いて正解だと思う方にいってもらおう。質問の中でお台場に行ったことがありますか、等を聞く 途中から学習者同士で聞き合う</p> <p>②人間ビンゴ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習者にビンゴカードを配る ・やり方を説明 ・学習者同士で質問し合う ・東女生はできているかサポート ・ビンゴになった人が出たら終了(時間を見て調整) 	<p>【使用道具】</p> <p>①・PPT</p> <p>②PPT</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビンゴガード
10:10-10:20	<p>【日常にある錯覚について紹介(10分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道路 ・ディズニーのシンデレラ城 ・ミカンのネットが赤いと美味しそうに見える ・新宿駅東口の猫の広告の動画を流す <p>錯覚を身近に感じてもらうために 「見たことありますか」と学習者に振ったり、錯覚がある場所を伝える</p>	<p>進行：福本、佐野</p> <p>【使用道具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PPT
10:20-10:30	<p>【休憩(10分)】</p>	<p>BGM をかける</p>
10:30-11:50	<p>【錯覚を作る工作+文型(90分)】</p> <p>①ソーマトロープ(10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人ずつ違う絵柄のものを用意 ・輪ゴムを通してもらい完成 ・作ったものをそれぞれやってみる ・他の人が作ったものもやってみる ・「まるで○○のように見えます」導入 	<p>進行：</p> <p>①内田</p> <p>②内田</p> <p>③竹内</p> <p>④佐野、福本</p> <p>他メンバー：サポート</p> <p>机の配置：島型</p>

	<p>②こま(10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10種類ほどの絵柄を用意 ・爪楊枝を刺してもらい完成 ・こまを回してもらう ・「〇〇が一番好きです」導入 <p>③ダイソー 錯覚工作キット(30分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キットは事前に切っておき、貼り付けるだけにしておく <p>3-1 トリックルーム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きさ比ペイラストは色塗りも行う ・昨日の復習(比較)～より大きい、小さい、〇と〇は同じ大きさ ・「(比較)～のように見えます」 <p>3-2 トリックハウス</p> <p>見る場所によって錯覚が見え方が違うことを体で伝える</p> <p>④オノマトペを使う錯覚</p> <p>4-1 ぐるぐる チカチカ</p>	<p>(作業中は向き合って行う)</p> <p>【使用道具】</p> <p>①・切って穴を開けた型紙</p> <ul style="list-style-type: none"> ・輪ゴム <p>②・切ってあるこまの型紙</p> <ul style="list-style-type: none"> ・爪楊枝 <p>③・切ってあるキット</p> <ul style="list-style-type: none"> ・のり ・色鉛筆
11:50-12:00	【休憩(10分)】	BGM をかける
12:00-12:15	<p>【明日の確認(15分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・江戸時代の説明 ・東京トリックアート迷宮館への行き方 <p>西荻窪、新宿、東京レポートのどこで集合するか決める</p> <p>集合する駅ごとに集合場所の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明日の解散後の流れ 	<p>進行：佐野</p> <p>【使用道具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PPT
12:15-12:30	<p>【終わりの挨拶(15分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感想 <p>楽しかったことを一つ発表</p> <p>→「〇〇が1番楽しかったです」の文型を</p>	<p>進行：佐野</p> <p>【使用道具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PPT

	使った質問	
--	-------	--

【良かった点】

- ・話すスピードや一日目の反省点だった、ありがとうございますと言いすぎないことに注意できた。
- ・休憩中も学習者と対話することができた。

【改善点】

- ・工作中、音楽を流していなかったため、無言の時間ができてしまった。
- ・PPTで説明して対話をせずに終わってしまうところがあった。

<3日目 2024年8月4日(日)>学習者：6名

目標：錯覚を実際に体験して理解を深める

時間	活動内容	備考
9:30 10:30	<p>【集合 東京テレポート駅】</p> <p>①西荻窪(9:30)</p> <p>②東京テレポート(10:30)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どちらかで待ち合わせ後、全員で東京テレポート駅に集合 ・東京トリックアート迷宮館まで徒歩(5分) 	<p>【西荻窪駅】</p> <p>内田、篠原</p> <p>【東京テレポート駅】</p> <p>佐野、竹内、福本</p>
11:00-	<p>【入場開始】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集合写真を撮る ・混雑時は2チームに分かれて鑑賞する ・今までに習った文型を意識する ・必ず撮ってくる写真→忍者、動物、昔の日本の写真、海の生き物、自分が大きく見える所 	<p>【チーム①】</p> <p>佐野、篠原、竹内</p> <p>【チーム②】</p> <p>内田、福本</p>
12:30	<p>【現地解散】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・残りたい人は現地で昼食も食べられることをアナウンス 	

【良かった点】

- ・集合場所を2ヶ所にしたため、東京テレポートまで学習者と東女生が一緒に行ったり、学習者の居住地から行きやすい方を選んだりしてもらうことができ、迷わず集合できた。
- ・混雑時に備えて事前に2チームに分けておいたため、スムーズに写真撮影ができた。

【改善点】

- ・時間に余裕を持って集合しすぎたため、営業開始前に着いてしまい、時間を持て余してしま

った。

・初めてお台場に来る学習者がほとんどだったため、事前に昼食場所やお台場についてもう少し調べしておき、説明できるようにしておけばよかった。

< 4日目 2024年8月5日(月)> 学習者：2名

目標：2日目・3日目の活動を活かしてトリックアートを仲間と協力して作る。説明書を読み取る。錯覚に関するワードについて実践的に利用する。

時間	活動内容	備考
9:30- 9:40	【挨拶】 ・出席確認と今日の流れ説明	進行：福本 机の配置：教室型
9:40- 9:50 10分	【アイスブレイク】 寄せ絵 4問 ・絵の中に見つけたモノを数える（簡単なものから始める） ・何個あったか最後に答え合わせする。答え合わせはPPTで作成 ・個人戦（30秒）数を紙の端に書いてもらい、それぞれ会話形式を使用しながら5分で答え合わせを行った	進行：内田、福本 机の配置：教室型 【使用道具】 ・印刷した寄せ絵 ・マーカー ・タイマー ・PPT（答え合わせ）
9:50-10:20 30分	【トリックアート迷宮館の思い出を振り返ろう】 全員でPPTに映っている写真を見ながら(アルバムをみながら)感想を言い合う（8枚くらい） →○○のように見えます その中でどれが一番好きか決めてもらう G:どの写真が一番好きですか G:私はこの写真が一番好きです ・POPの説明を行い、実際にかいてもらう ・12枚の写真をA3用紙に印刷し、後ろ黒板に貼り、チョークで写真の説明を書いてもらう ・文法間違いは指摘をする	進行：竹内(文型の紙)/篠原（発表） 机の配置：教室型撮影した写真をみんなで見ると見る） 【使用道具】 ・勉強した文型とPOPの見本をまとめたもの ・撮影写真 ・パソコン(撮影した写真を見る用)
10:20-	【休憩(10分)】	BGMをかける

10:30		
10:30- 10:45	<p>【錯覚を体験しよう】</p> <p>言葉としての錯覚を使えるようになる</p> <p>(1) ベルベットハンド錯覚 →まるで○○のように感じるという錯覚を味わってもらおう</p> <p>(2) 違う大きさ同じ重さの錯覚 →本当は同じ重さなのに感じ方が違うことを体験 錯覚という言葉について改めて知ってもらおう</p>	<p>進行：竹内</p> <p>【使用道具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・粘土 ・発砲スチロール ・工作用紙 ・PPT
10:45- 11:05 20分	<p>【錯覚を体験しよう】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水かジュースか <p>水と透明のジュースを飲む「水だと錯覚する」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・立体ボディーシール <p>浮き出て見えるシールを体(手など)に貼る 「花が浮いているように見えます」 →「錯覚する」という言葉を導入</p>	<p>進行：佐野</p> <p>机配置：教室</p> <p>【使用道具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろはす(水、桃味、マスカット味) ・立体ボディーシール
11:05- 11:15	<p>【休憩(10分)】</p>	BGM をかける
11:15- 11:50	<p>VR 体験</p> <p>(海中の動画、ジェットコースターの動画→扇風機の風を当てることで臨場感を出す)</p> <p>→「錯覚する」を使って、どのように見えたか言ってもらおう。また、映像に基づいて会話を派生する 「まるで海にいます」「まるでジェットコースターに乗っているようです」</p>	<p>進行:佐野</p> <p>【使用道具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・VR ゴーグル ・映像を見る用のスマートフォン(メンバー私物) ・扇風機
11:50- 12:00 10分	<p>【終わりの挨拶】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しかったことを一つ発表 <p>→「○○が1番楽しかったです」の文型を使う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・質問や明日の確認を行い、集合写真をとった 	<p>進行：佐野</p> <p>机の配置：前を向ってもらおう</p>

【良かった点】

- ・学習者が2人という状況になったが、臨機応変に動き楽しめる内容を準備できた。

・休み時間の会話が盛り上がった。

【改善点】

・学習者が単語を調べようとしていたときに文字化して示すべきであった。

・アイスブレイクの隠し絵クイズの際に想定と異なる答えがでてきて、そのようなシナリオも先読みすべきであった。

・トリックアート迷宮館を振り返る際に、発表しやすいような写真を選ぶ、且つ例文を提示すべきであった。

・進行役と学習者のみの会話が多かった。1人の負荷がかからないように役割分担をきっちりと明確にする。協働学習であるということを忘れない。

・基本の文法は丁寧におこなうこと。学習者の言葉を繰り返すときに単語のみの返答が目立った。

< 5日目 2024年8月6日(火)>学習者：4名

目標：発表を通じて、日本語で考えることや日本語を話す楽しさを実感してもらう

時間	活動内容	備考
9:30-9:35 5分	【挨拶】 ・今日の流れと昨日やったことの確認 (時間がないため簡単に紹介)	進行：竹内 机配置：島型(学習者の間にメンバーが入れるよう配置)
9:35-9:45 10分	【アイスブレイク兼発表順番決め】 数字で並ぼう お題 ・誕生月 ・スマホの充電残量 ・好きなものの五十音順 ・順番を忘れないように把握しておくこと T: 最後に、みんなの好きなものについて知りました。これをうちわに書いて紹介しましょう	進行：竹内(入り～充電残量)、福本(好きなものの五十音順～締め) *早く終わったらアルバムづくりに回る 教室の右側の空いているスペースを使用
9:45-10:25 40分	【錯覚うちわ作り】 40分 作成時間(題名決めの時間含め) ・うちわを知っているか尋ね、PPTを使っ	進行：竹内 補佐：篠原

	<p>てうちわの導入をする</p> <p>T:今回は、錯覚のうちわを作ります 裏面には、自分の好きなものを書いてみましょう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・錯覚の画像をうちわに貼り、シールやペンで装飾する ・うちわの題名を決めてもらい、作者名と共に書いてもらう 	<p>机配置：島型</p> <p>【使用道具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うちわ ・工作で使う材料(ハサミ、のり、画用紙、色鉛筆、カラーペン、シール、スパンコール) ・題名を書く紙 ・筆記用具 <p>メンバーは学習者のサポート役として見守りながら一緒に作る</p>
10:25-10:35	【休憩】 10分	<p>BGM をかける</p> <p>【使用道具】</p> <p>ワイヤレススピーカー</p>
10:35-11:05 30分	<p>【発表鑑賞】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うちわの題名と好きなところを発表 ・篠原が見本としての発表 <p>T:ゆまさん、題名はなんですか？ T:好きなところはどこですか？ (好きなところについて深掘り質問をする)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前で発表→席に戻って質問を受ける ・学んだ文型だけではなく言いたいことを言ってもらえるような「会話形式」にする →それぞれのうちわに対して深掘りする質問を考える。メンバーでなく学習者も質問できるよう促す 	<p>進行：内田 補佐：福本</p> <p>机の配置：島型</p> <p>メンバーは、学習者の発話を増やせるようなサポートする</p>
11:05-11:15	【休憩】 10分	<p>BGM をかける</p> <p>【使用道具】</p> <p>ワイヤレススピーカー</p>

<p>11:15-11:45 30分</p>	<p>【アルバム作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習者に他の学習者へのメッセージカードを書いてもらう ・それぞれ好きな写真を選び、色紙に配置して貼ってもらう ・表に写真、裏にはメッセージカードを貼る 	<p>進行：佐野 机の配置：島型 メンバーは、学習者がメッセージを書く際のサポートを行う</p> <p>【使用道具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・色紙 ・はさみ、のり ・メッセージカード (メンバーは事前を書いておく) ・5日間の学習者の写真 (事前に印刷し、切っておく)
<p>11:45 - 12:00</p>	<p>【表彰式】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メダルと感謝状、トリックアート迷宮館で購入したポストカードの贈呈 ・記念写真撮影 	<p>進行：佐野</p> <p>【使用道具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メダル (真ん中に集合写真を入れたものを事前に折り紙で作っておく) ・感謝状 (ダイソーで売っている賞状に文字を入れたものを準備しておく) ・錯覚のポストカード
<p>12:00-</p>	<p>【終わりの挨拶】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メンバーから学習者へ御礼の挨拶 	<p>進行：佐野</p>

【良かった点】

- ・アイスブレイクでは、1日目、2日目、4日目の反省を踏まえて、コンパクトに終わらせることや、学習者のレベルを意識してスムーズに行うことが出来た。
- ・うちわづくりでは、メンバーも学習者の間に入ってうちわ作りに参加したり、学習者から好きな音楽を募ってスピーカーで流すことで、学習者とメンバーとの壁や、沈黙の時間をなくせるように改善することが出来た。

・うちわの発表では、これまでの反省で、学習者のレベルが全員上級にも関わらず、型にはめた発言を促してしまっていたということがあったため、それぞれの発言に各々で深掘りしながら進行する「会話」を重視した方法を採用し、学習者の発話量や発言を制限することなく、終始明るく楽しい雰囲気を進めることが出来た。

・アルバム作りでは、これまでの反省で、学習者の活動を見ているメンバーが立っていることで、学習者との壁があったということがあったため、メンバーがサポートする際は、立って学習者の周りを囲むのは避け、座ってサポートすることを心掛けた。

・4日目までの反省で、自分の担当の部分以外のフォローを他メンバーがうまく出来なかったという反省があったが、他メンバーの担当の部分でも、上手く発言を引き出せせるようなフォローをすることが出来た。

【改善点】

・うちわ作り、発表、アルバム作り、表彰式というように、活動が多かったため、学習者の前で準備してしまうことがあった。

・それぞれの活動時間が限られてしまっていたため、学習者を焦らせてしまう場面もあった。特に、アルバム作りの際、学習者がメッセージを書くのに、悩んでいる様子もあり、そのような時間も考慮に入れて活動を組むべきだった。

8. 5日間のまとめと後輩への助言

最後に、5日間の学内実習のまとめとして、私たちが実習で学んだことについて述べることで、報告書を締めたいと思います。

私たち学内実習牛タンチームは、学習者集めから苦戦したり、各日程で参加する学習者の人数が変わったり、それぞれの日程で改善点や反省点が沢山出てきたりと、一筋縄ではいかないことが数えきれないくらい多くありました。しかし、メンバー間で話し合いを重ね、協力し、柔軟に対応しながら5日間を終えることができました。そして、この教育実習を通して私たちは、最後まで諦めずやり抜く姿勢や、状況に応じて臨機応変かつ柔軟に対応することの重要性を学ぶことが出来ました。

このように学内実習では、企画から学習者集め、教案作成、実習と多くのことをこなさなければなりません。しかし、学習者が集まらず、直前まで実習が実施できるか分からない状況になるなど、様々な困難がありながらも実習を乗り越えることができたという経験は、かけがえない財産になりました。これから、実習を行う後輩の皆さんも、どうか最後まで諦めず、実習に臨んで下さい。この教育実習が皆さんにとって良い経験になることを願っています。

最後になりましたが、この教育実習は、チラシ配りに協力して下さった日本語学校をはじめとする日本語教育機関の方々、実習前から実習中実習後まで、サポートして下さった松尾先生、吉本先生、日本語教員養成課程事務室の皆様、夏休みの貴重な5日間を使って参加して下さいました学習者の方々など、多くの方々の協力があり、実施することができました。

全ての関係者の方々に、この場を借りて、深く御礼申し上げるとともに、教育実習の報告とさせていただきます。

9. 実際の様子

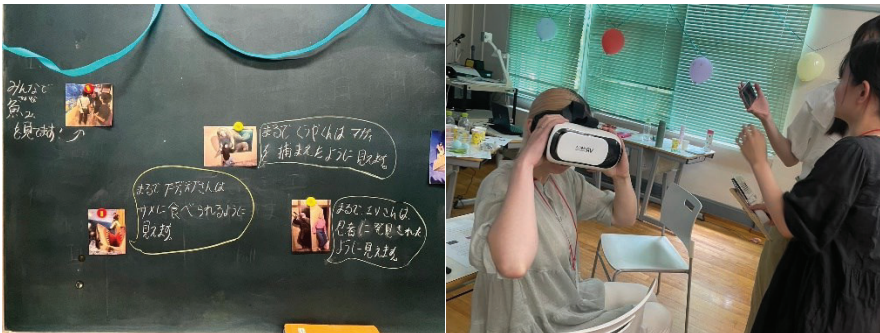
2 日目



3 日目



4 日目



5 日目



◆ てんぷらうどん ◆
「日本の夏を知ろう！」

菊川涼佳

種本葉

藤原小百合

松本夏実

松本まりな

李韶敏

てんぷらうどんチーム

菊川涼佳
種本菜
藤原小百合
松本夏実
松本まりな
李韶敏

1. テーマ

「日本の夏を知ろう！」

2. 対象レベル

- ・初級以上(大学生以上)

3. 目標

- ・お祭りを勉強してリアルな日本文化を体験する
- ・お祭りを勉強してリアルな日本語を話せるようになる

4. 参加者の概要

年齢	性別	国	日本滞在歴	日本語勉強歴	所属	日常会話	出欠
20	男性	台湾	5ヶ月	1年1ヶ月	JET 日本語学校	できる	全日
22	男性	香港	4ヶ月	1年～2年	JET 日本語学校	できる	全日
24	男性	香港	4ヶ月	1年9ヶ月	JET 日本語学校	できる	全日
26	女性	ドイツ	4ヶ月	7ヶ月	カイ日本語スクール	むずかしい	全日
26	男性	フィリピン	1年	3ヶ月	新宿日本語学校	できる	1～3日目参加
28	男性	香港	5ヶ月	3年～4年	JET 日本語学校	できる	全日
33	男性	コスタリカ	5ヶ月	4ヶ月	JET 日本語学校	むずかしい	全日
39	男性	アメリカ	2ヶ月	1ヶ月	JET 日本語学校	むずかしい	全日

5. 開催概要

- (1) 日時：8/2(金)、8/3(土)、8/4(日)、8/5(月)、8/6(火) 9:30～12:30
- (2) 申込期間：6/28(金)～7/28(日)

6. 実施までのスケジュール

月	活動内容
4月	○チーム分け ・チーム名決定
5月	○コース概要の決定 ・役割決定 ・開催時間、外出先、募集条件の決定 ・クラスの到達目標決定
6月	○共有アカウント作成 ○ポスター完成、提出 ・ポスター案提出【6/21(金)】 ・最終原稿提出【6/25(火)】 ・ポスター発送【6/28(金)】 ○参加者募集開始【6/28(金)】 ○教案作成、検討
7月	○教案作成、検討 ○参加者募集 【6/28(金)～7/25(木)→説明会不参加者発生のため7/28(日)まで延長】 ○オンライン説明会の実施【7/21(日)、23(火)、24(水)、30(火) 19:00～20:00→追加実施 8/1(木)】
8月	○教案完成 ○前日準備 ・教室設営 ・名簿提出 ○実習【8/2(金)～8/6(火)】 ・授業実施 ・フィードバック
9月	○実習報告書作成 ○実習報告会準備
10月	○実習報告会【10/19(土)】 ○実習報告書提出【10/31(木)】

7. 五日間の活動の概要

日付	活動内容
8/2(金) オンライン	目標：「 <u>仲を深め、互いの国の祭りについて知る</u> 」 ・注意事項、目標 ・自己紹介 ・アイスブレイク：アニメを通して、夏祭りを知る ・日本のお祭りを勉強する ・お祭りを5つ紹介 ・クイズ

	<ul style="list-style-type: none"> ・話しましょう：参加者の国のお祭りについて（3チーム） ・グループで話したことをシェアしましょう ・みんなで今日の感想を話しましょう ・明日の連絡と終わりのあいさつ ・アンケート実施
8/3(土) 学内	<p>目標：「<u>日本のお祭りを楽しみ、日本語をたくさん使う</u>」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・復習：お祭りのことば ・アイスブレイク：究極の2択 ・うちわ作り ・話しましょう：作成したうちわについて ・盆踊り ・模擬縁日 ・話しましょう：今日の授業についての感想 ・明日の連絡と終わりのあいさつ ・アンケート実施
8/4(日) 学外	<p>目標：「<u>実際に学外でお祭りを体験し、リアルな日本の夏を知る</u>」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集合：西荻窪駅 ・電車で中野駅前大盆踊り大会に行く ・注意事項と今日の連絡 ・ミッションを提示 ・全体写真撮影 ・グループごとに自由行動 ・合流し、明日の連絡と終わりのあいさつ ・中野駅解散、自由行動
8/5(月) 学内	<p>目標：「<u>アルバムを完成させ、3日目の思い出を形に残す</u>」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・復習：前日のアンケートの代わりに感想を聞く ・アイスブレイク：大判かるた ・インタビュー活動①：ペア活動×2回 ・インタビュー活動②：全員にインタビュー ・アルバム作成 ・明日の連絡と終わりのあいさつ
8/6(火) 学内	<p>目標：「<u>勉強した日本の祭りについて振り返り、理想の祭りを考え、発表</u>」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アイスブレイク：フルーツバスケット ・アルバム作成 ・発表会：アルバムについて ・話しましょう：行きたいお祭り ・発表会：行きたいお祭りについて ・みんなで5日間の感想を話しましょう ・修了証配布 ・東女ツアー・学食

8. 一日ごとの振り返り

【1日目】8月2日（金）オンライン 9：30～11：30

参加者の目標	実習生の目標
<ul style="list-style-type: none"> ・自分のことを話します。 ・他の人のことを聞きます。知ります。 ・お祭りについて勉強をします。 ・みんな、なかよくなりましょう！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者と仲良くなる。 ・参加者を知る。 ・日本のお祭りを伝える。 ・参加者の国のお祭りを知る。

時間：2時間	活動内容：実習生と参加者の動き
9：20 ～ 9：30	<p>【 1.入室・待機対応（10分）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ <p>※実習生はカメラとマイクをオンにし、入室する参加者に笑顔であいさつ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業開始までに Zoom の名前表記を「呼んでほしい名前」に変えるようにアナウンス
9：30 ～ 9：35	<p>【 2.授業開始、出席確認（5分）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カメラオンのアナウンス ・再度 Zoom の名前表記を「呼んでほしい名前」に変えるようアナウンス ・実習生の作成した名簿順に出席確認
9：35 ～ 9：45	<p>【 3.注意事項、目標の説明(10分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業にあたっての「お願い」を4つ説明(録画の許可、緊急時の対応法、飲食の有無と参加場所、撮影の禁止) ・5日間の目標と今日の目標を説明
9：45 ～ 10：00	<p>【 4.自己紹介（15分）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介の内容確認(名前、呼んでほしい名前、出身、好きなもの2つ) ・事前に進行者が決めた順で、参加者と実習生交互に1人ずつ自己紹介 <p>※進行者は1人ずつの発表に対して、具体的な質問を2つ程し、交流する</p> <p>※参加者同士や実習生と好きなものが被っていた場合、「〇〇さんも好きですね！」などと繋ぐ</p>
10：00～10：20	<p>【 5.アイスブレイク（20分）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アニメを通して、夏祭りを知る ・説明会を通して得た参加者の好みのアニメを画像で取り入れ、これから「アニメ」を通して夏祭りを見ていくことを説明 ・単語を導入(たこ焼き、お面、花火、盆踊り、浴衣、ヨーヨー) <p>※全員マイクをオンにして、各単語に対し、2回ずつ繰り返し発音</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アニメの動画を見て、(たこ焼き、お面、花火、盆踊り、浴衣、ヨーヨー)が実際にお祭りで登場することを説明
10：20～10：25	<p>【 6.休憩（5分）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カメラとマイクをオフにして休憩のアナウンス

10 : 25～10 : 50	<p>【 7. 日本のお祭りを勉強する (25分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本のお祭りを5つ紹介する (ねぶた祭り、だんじり祭り、日向ひよっとこ祭り、秋田竿燈祭り、阿波踊り) ・各お祭りに1つずつ雑学のような面白いクイズを取り入れる ・クイズでは問題文と選択肢を2回繰り返し読み、正解だと思うもの1つに手を挙げることを説明 ・30秒ほど考える時間を取る ・答えの発表と解説 <p>※一方的な日本のお祭りの説明にならないようにするために、参加者も手を挙げることで参加しているという気持ちになるよう工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最後に5つのうちのお祭りに一番行ってみたいか、理由とともに聞く
10 : 50～10 : 55	<p>【 8. 休憩 (5分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カメラとマイクをオフにして休憩のアナウンス <p>※休憩の間に東女生は次のスライドの準備を整える</p>
10 : 55～11 : 10	<p>【 9. 話しましょう (15分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブレイクアウトルームに実習生が2人ずつ(計3チーム：A, B, C)に分かれ、参加者の国のお祭りについて聞く/話してもらう <p>※説明会で把握した参加者の日本語レベルに合わせて5～6名ほどの参加者と実習生混合グループを設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話す内容の説明(3分)「みなさんの国のお祭りで、①何をしますか? ②何を食べますか? ③何がありますか? ④何を飲みますか? を教えてください」 ・ブレイクアウトルームで話し合い(12分) <p>※各グループでスライドを画面共有し、話した内容を実習生が記録</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体のルームに戻る
11 : 10～11 : 15	<p>【 10. グループで話したことをシェアしましょう (5分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各グループで話した内容を全体で簡単に共有してもらう <p>※進行者がグループの参加者に発言を促す「グループ(A, B, C)の〇〇さん、グループでどんな話をしましたか?」</p>
11 : 15～11 : 25	<p>【 11. みんなで今日の感想を話しましょう (10分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習生と参加者全員が一言ずつ感想を話す(今日一番面白いと思ったこと、今日一番おどろいたこと+今日の目標ができたか) ・進行者が自己紹介をした順に当て、全員が感想を話す
11 : 25～11 : 30	<p>【 12. 明日の連絡と終わりのあいさつ (5分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明日の活動内容と集合時間、持ち物、大学へのアクセスを再度説明 ・今日の授業アンケートの実施 <p>※事前に授業アンケートをGoogleフォームで作成し、最後のスライドにQRコード/チャットにリンクを提示→回答を終了次第、順にZoomを退出</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明日対面で会えることを楽しみにしていると最後のあいさつをし、終了

良かった点

- ・参加者が入室する段階から実習生が明るく笑顔であいさつをし、リアクションをしたことで、参加者の顔に徐々に笑顔が増え、説明会時より距離を縮めることができた
- ・アニメでお祭りを勉強する導入において、説明会で得た参加者の好きなアニメの画像を取り入

れていた。そのため、参加者の笑顔が見え、全体の緊張した空気感が少しほぐれた。

- ・進行者が説明会で得た参加者の情報や当日一人一人が発言したことを覚えており、会話に入っていた（例：「これは、〇〇さんが好きな△△ですね」など）。参加者の存在をしっかりと踏まえたうえで、教案の台本を超えたコミュニケーションを実践できた。
- ・全員でマイクをオンにして発話練習をしたことで参加者の声を聞く機会を増やすことができた。
- ・ブレイクアウトルームで参加者のお祭りについて知り、相互の学び合いとすることができた。

反省点

- ・日本のお祭りを5つ紹介する中で動画を見せたが、その後のフォロー＝次に移るときの一言が言えず、あまり繋がりが見えなかった。（例：秋田竿燈祭りで竿燈を落としてしまった動画を全員視聴し、驚いていた参加者のリアクションに反応せず、すぐ次の話に行ってしまった…）
- ・1人の参加者がブレイクアウトルームに入れず退室するトラブルが発生。進行者同士がその場でやり取りを行い、役割を分担したことで冷静かつ迅速に対応することができた。しかし、オンライン授業の際は緊急時の対応を想定し、名簿を手元に用意しておく、全員がブレイクアウトルームに移動するのではなく誰かしらは必ず待機室に残るなどより細部までしっかりと想定し、対策を確認しておくべきことに気がついた。また、各メンバーの役割分担が大事であった。
- ・クイズで発言してくれた参加者の回答が間違っていた。その際、実習生のフォローアップとして「間違えても大丈夫」と伝えましたが、参加者に申し訳なさそうな反応をさせてしまった。誤答をあらかじめ準備の段階で予想をし、それらをフォローするスライドを入れておくなど対策が必要。
- ・はじめに、してはいけないことのお願ひだけでなく「日本語を間違えても大丈夫です。皆さん楽しく日本語で話してください。」等の内容を入れ込むと参加者が話しやすい環境を作れた。

【2日目】8月3日（土）対面 9：30～12：30

参加者の目標	実習生の目標
<ul style="list-style-type: none">・日本のお祭りを楽しむ・日本語をたくさん使う	<ul style="list-style-type: none">・「やる」「やります」の単語を使わない・参加者同士のやり取りができるように進行する

3時間	活動内容：実習生と参加者の動き
9：20～ 9：30	【1.入室対応（10分）】 <ul style="list-style-type: none">・<u>正門受付2人</u><ul style="list-style-type: none">・提出した名簿に、入構時刻を記入し、出欠を確認できるようにする・名札を配布する・教室まで案内する・<u>教室受付2人</u><ul style="list-style-type: none">・出欠表の記入・しおりにシールを貼る・トイレに案内する※男性トイレは教室近くに無いため、案内が必要

9:30～ 9:35	<p>【 2.今日の目標を説明 (5分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標・することを提示する ・参加者が目標を理解しているかを表情を見て確認する ・実習生は座らず、各テーブルを柔軟に動けるようにする ・適宜、近くの実習生がフォローする
9:35～ 9:55	<p>【 3.復習+アイスブレイク (20分)】</p> <p>○復習：お祭りのことば</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1日目にアニメで覚えた (たこ焼き、お面、花火、盆踊り、浴衣、ヨーヨー)を復習 ・覚えている参加者に答えてもらい、全員で復唱する <p>○究極の二択</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者を教室後方に移動させる ・床の真ん中にビニールテープを貼り、AとBに分けたスペースに移動してもらう ・全5問 <p>①アイス vs かき氷 ②プール vs 海 ③肉 vs 魚 ④Jpop vs Kpop ⑤インドア vs アウトドア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3問目まではAとB該当するものに分かれるのみにし、人数を数えて盛り上げる ・4問目以降は、分かれた後に近くの人と会話する ・進行者以外の実習生も参加する ・隣の人にリレー式に聞いていくことで発話する機会を作る
9:55～ 10:15	<p>【 4.うちわ作りの説明(20分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うちわについて説明する ・うちわの見本を見せながら、使い方や言葉、うちわ作りの活動を説明
10:15～ 10:40	<p>【 5.うちわ作り(25分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進行者以外の実習生はペン、筆ペン、うちわ、模様の資料などを配布する ・全員でうちわに知っている文字、書きたい文字、好きな文字・絵を書く ・書きたい文字を聞き、辞書やスマートフォン等を使って一緒に調べる
10:40～ 10:50	<p>【 6.話しましょう(10分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループの人に、作成したうちわを紹介する ・うちわのデザインについて、そのデザインにした理由を話す、聞く ・グループでの共有が終わったら、違うグループの参加者と実習生に向けて作成したうちわについて紹介する <p>※参加者同士で会話を回してもらうことを心掛ける ※適宜、参加者の発言をフォローする</p>
10:50～ 11:05	<p>【 7.休憩(15分)】</p> <p>※教室近く(6号館2階)に男性トイレが無いので、案内が必要</p>
11:05～ 11:20	<p>【 8.盆踊り(中野音頭)を踊ろう(15分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習生はサイリウムライトを全員に配布する ・電気を消し、サイリウムライトを使用し、踊ることへの恥ずかしさを軽減する <p>※前日、踊ることに対する抵抗を見せた参加者がいたため</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・教室後方に移動し、円形になり、参加者の間に実習生が入る ・見本動画を流して実習生が踊りを見せた後、円形に動いて全員で踊る ・休憩前の活動で作成したうちわを持って踊り、その後うちわを回収する <p>※3日目に使用するため</p>
11:20～ 12:10	<p>【 9. 祭りを楽しむ(50分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・説明(5分)+模擬縁日(45分) ・模擬縁日の屋台：射的、輪投げ、ヨーヨー、折り紙 ・参加者は好きなどころに行き、チケットと得点表を各担当実習生に渡し、遊ぶ ・全員が1周したら、2周目3周目の呼びかけをする ・BGMをお囃子や事前にリサーチした参加者の好みに合わせる ・景品は説明の際に予め提示する ・実習生は駄菓子と祭りのおもちゃを配布できるよう準備しておく ・ゲーム終了後、自席についてもらい、点数に応じた数の景品を渡す
12:10～ 12:30	<p>【 10. 感想と明日の連絡、終わりのあいさつ(20分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日の活動(うちわ作り、盆踊り、模擬縁日)について振り返る ・参加者を指名して、今日の感想を全体で言ってもらう ・明日(3日目)の集合時間、場所、持ち物を強調して説明する <p>集合時間 15:00 集合場所 西荻窪駅改札内 持ち物 しおり、飲み物</p> <ul style="list-style-type: none"> ・しおりとスライドを使い、写真を見せながら、集合する場所を指示 ・今日の授業アンケートの実施 <p>※事前に作成した授業アンケートの Google フォームを、スライドに QR コードで提示する。回答が終了した学生から順に受付で退出時間を記載し、解散</p>

良かった点

- ・リアルな日本語を学んでもらうことができた。特に、「銃を引きます」や「バッチリです」というさりげない言葉を参加者に新たなフレーズとして伝えることができた。
- ・アイスブレイクやこれまでの授業を通じて得た参加者の情報をもとに、休憩中に話を広げることができた。対面で会話することで参加者の笑顔も増え、距離が近くなった。
- ・アイスブレイクと模擬縁日では参加者のテンションが上がり、参加者同士で会話する場面も見られ、クラスとしての距離が縮まった。
- ・参加者の取り組みに応じて柔軟に活動の時間を調整することができた。

反省点

- ・9:30 から授業開始であるにもかかわらず 9:30 に到着する学生が数名いた。9:20 集合であることを強調すべきであった。4 日目以降の集合時間の伝え方を変更する反省となった。
- ・授業の流れを遮らないような、適切な訂正ができなかった。訂正を行うイメージや担当者を決めていなかったため。参加者が作成したうちわについて発表する際に、「家」の読み方に誤りがあったにもかかわらず、訂正せずに授業を進行してしまった。また、「家紋」という難易度の高い単語をあまりフォローせずに進んでしまった。他の参加者のためにも翌日以降は、適宜、参加者の発言をサポートする担当を 2 人ずつ設ける必要性を学んだ。

- ・実習生はリハーサルを行い、全員の動作を確認することの重要性を実感した。特に、お祭りコーナーの動作確認ができておらず、ぶっつけ本番だったためバタついてしまった。
- ・模擬縁日の屋台の順番待ちでは座ってスマホを見てしまう学生がおり、うまくフォローができなかった。進行役を1人作り、声かけや他のコーナーに案内するなど対応があると良かった。
- ・「さんこ、みつつ、よんこ、よつつ…」など数詞を統一せず、参加者を混乱させてしまった

【3日目】8月4日（日）対面 15:00～17:00

参加者の目標	実習生の目標
<ul style="list-style-type: none"> ・実際に学外でお祭りを体験し、リアルな日本の夏を知る ・ミッションを通して思い出を記録に残す ・他の参加者や実習生とたくさん交流をする 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の関心を引き出し、活動の思い出となる記録を残す ・参加者とリアルな日本語でたくさんコミュニケーションをし、仲を深める

2時間	活動内容：実習生と参加者の動き
15:00	【 1. 集合/出席確認】 <ul style="list-style-type: none"> ・西荻窪駅改札内に集合(駅を利用する方々の迷惑にならないよう注意) ・中野駅は混雑が予想されるため、参加者をお手洗いにいかせる ・出席確認
15:00 ～ 15:15	【 2. 電車で中野駅に移動 (15分)】 <ul style="list-style-type: none"> ・中野駅集合の参加者に連絡を入れ、合流する
15:15 ～ 15:40	【 3. オフィスビルの1階のスペースで注意事項と今日の連絡 (25分)】 <p>①注意事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・非常に気温が高く暑いため、水を適宜飲むこと ・もし気分が悪くなったら、実習生に伝え、涼しいところに移動すること ・無理をしないこと ・お手洗いや屋台、コンビニなどどこかへ行きたい場合は実習生に一声かけてから一緒に移動すること <p>②連絡先の交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・迷子になった場合の連絡手段としてLINEを聞き、それぞれグループを作成→最後に写真を共有する際にも使う。LINEを持っていない参加者にはSMSやその他のSNSアプリを使用して連絡手段を確保 <p>③チーム分けの説明とミッションの説明、配布物</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日一緒に行動するチームを説明(実習生3名と参加者4名の計7人グループを2つ) ・チーム名を決める ・各グループの担当者が2日目に作成したうちわを配布 ・しおりを持ってきた参加者には出席シールを貼る ・ミッションのおさらいをする <p>▷ミッション</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 好きな屋台の写真を撮ります

	<p>2. 盆踊りの写真を撮ります 3. 提灯の写真を撮ります 4. みんなで写真を撮ります 5. 盆踊りをします</p> <p>※盆踊りのタイムスケジュールが不明のため、5のミッションは柔軟に変更する。 (盆踊りの音楽を聞きますなど) ※実習生も参加者と同様のミッションを行う ※各グループ内で実習生は事前に①連絡係②写真係③タイムキーパーの3つの係に役割分担、連絡係→参加者対応、もう一つのチームの連絡係と連携する</p>
15:40 ～ 15:50	<p>【4. お祭りへ移動、全体写真撮影 (15分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一列になって歩くときは、実習生が参加者を挟む形で移動(行動)する ・ステージ裏のスペースで全体とグループ別の集合写真を撮る
15:50 ～ 16:50	<p>【5. グループごとに自由行動 (60分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各グループで屋台などを見て回り、ミッションを遂行 ・連絡係を通して常に互いの状況を共有する ・常に参加者の体調を気にかけて、帰りたい参加者には無理をせずに対応 ・事前に実習生が持参したレジャーシートを活用して、日陰で待機組と屋台で買う組に分担し、休息を取りながらお祭りを楽しむ
16:50 ～ 17:00	<p>【6. 合流し、明日の連絡 (10分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・両グループ合流し、何をしたのか共有 ・ミッションで撮影した写真をLINEの「アルバム」機能で各グループに共有 ・明日(4日目)の活動内容と集合時間、持ち物を再度説明 <p>※9:20 集合を強調する</p>
17:00 ～	<p>【中野駅解散・自由行動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・駅であいさつをし、残って楽しむ人は楽しみ、帰宅する人は帰宅する

良かった点

- ・前日の夕方に下見をしに行ったことで、動線や休憩スペース、14人が集まることができる場所、当日必要だと感じた持ち物などを把握することができ、スムーズに行動することができた。
- ・事前にミッションを設定したが非常に暑く、無理に強制させるのではなく、リアルなお祭りを体験し、楽しんでもらうことに重点を置いた。このため、参加者のストレスが軽減された。
- ・各グループで実習生が役割を決めて行動したことで、スムーズな連携を取ることができた。
- ・雨天時の場合や遅刻欠席があった場合などありとあらゆる可能性に行く前に想定し、対応法を全員で考えた。細部まで詰めたことで、悔いなく楽しい1日を終えることができた。
- ・実習生が参加者とたくさんコミュニケーションを取ったことで、参加者が満面の笑みになり、最後には「たくさん話すことができ、とても楽しかった」と伝えてくれた。

反省点

- ・前日に下見に行くまで、会場の様子や集合場所を把握できなかった。どのような屋台があり、盆踊りはいつするのか、雨天時の逃げ場など前日まで予定を決め切ることができなかった。
- ・ミッションができていないグループがあった。

【4日目】8月5日（月）対面 9:30 ~ 12:30

参加者の目標	実習生の目標
<ul style="list-style-type: none"> ・1、2日目の学習内容を用いて、前日の出来事を述べることができる ・前日の出来事について会話できる ・アルバムを完成させ、3日目の思い出を形に残す 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者からの発話を引き出す ・訂正を、流れを遮らずに行う ・語彙をコントロールする

3時間	活動内容：実習生と参加者の動き				
9:20 ~9:30	<p>【1.入室対応（10分）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正門受付2人 ・提出した名簿に、入構時刻を記入し、出欠を確認できるようにする ・名札を配布する ・教室まで案内する ・教室受付2人 ・出欠表の記入 ・しおりにシールを貼る ・トイレに案内する※男性トイレは教室近くに無いため、案内が必要 				
9:30 ~9:45	<p>【2.復習+アイスブレイク（10分）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前日どうだったか、感想をきく（3日目のアンケートを取らない代わりとして） ・実習生は適宜、参加者の発言をフォローする 				
9:45~ 10:10	<p>【3.アイスブレイク（25分）】</p> <p>「大判かるた」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊びのかるた、競技のかるた等の話を、アニメを用いて興味を引きながら説明 ・チーム戦で行うため、東女2名、参加者4名ずつのチームを事前に設定(いろんな人と交流できるように前日のお祭りのグループとはメンバーを変える) ・参加者が1人1枚は取れるように、人数×2枚ほど札や物を用意する <p>※大きめのレジャーシートの上に散りばめる。怪我防止のため、レジャーシートは確実に固定する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者に2回ずつ札を読んでもらう ・夏祭りといえばの食べ物やものについての内容と、スポーツやオリンピックなど、夏や参加者の興味のある分野についての内容を取り入れる ・景品として、勝ったチームには、2日目のゲームで余った駄菓子を配布し、全員に参加賞として2日目のゲームで余った金平糖を配布する 				
10:10 ~ 10:30	<p>【4.インタビュー活動① ペアワーク（20分）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進行者がペアワークの指示を出す ・進行者以外の実習生が参加者にワークシートを配布→(人数分+α印刷したもの) ・座席は前日のグループの人が混ざるように配置 <p>[座席] お祭りグループAとB</p> <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td style="width: 25%;">A</td> <td style="width: 25%;">B</td> <td style="width: 25%;">A</td> <td style="width: 25%;">B</td> </tr> </table>	A	B	A	B
A	B	A	B		

	B	A	B	A
	<ul style="list-style-type: none"> ・座席の前の人とインタビューし合う(10分) ・座席の横の人とインタビューし合う(10分) ・フィードバック 			
10:30 ～ 11:00	【 5. インタビュー活動② 全員にインタビュー (30分)】 <ul style="list-style-type: none"> ・ペアワークで使用したワークシートを使用 ・全員を立たせる ・全員に質問するよう促す ・全体のフィードバック 			
11:00 ～ 11:10	【 6. 休憩】 <ul style="list-style-type: none"> ・廊下のお菓子や飲み物でリフレッシュし、交流 ※写真やアルバム、装飾のためのペンやシール、折り紙を準備する			
11:10 ～ 12:20	【 7. アルバム作成 (70分)】 <ul style="list-style-type: none"> ・作業概要を提示 (3～5分) ・お祭りを一緒に行ったメンバー同士で座席に座ってもらう →実習生2名+参加者3～4名 ・明日、アルバムでどういう発表をするのか説明 (①アルバムに貼った写真のお気に入り順位を決め、1位の写真を選んだ理由を説明してもらう ②アルバムのデザインでこだわったポイントを説明してもらう) ・作業実施 (65分) ※実習生はお祭りに行ったグループに入り、参加者と思い出を語りながらアルバム作成の補助			
12:20 ～ 12:30	【 8. 明日の連絡と終わりのあいさつ (10分)】 <ul style="list-style-type: none"> ・明日(5日目)の活動内容と集合時間、持ち物を再度説明 ※9:20 集合を強調する <ul style="list-style-type: none"> ・今日の授業アンケートの実施 ※事前に授業アンケートを Google フォームで作成し、スライドに QR コードを提示 →回答が終了した学生に待機の指示			
授業 終了後	【 9. 集合写真撮影】 <ul style="list-style-type: none"> ・本館前の庭で全体写真を撮る →終了次第、受付で退出時間を記載し、各自解散			

良かった点

- ・前日のお祭りの活動が楽しかったのか、設定時間よりも早く集合してくれるようになった。
- ・アイスブレイクの大判かるたでは、チーム戦にしたことで参加者同士盛り上がり、笑顔で活動を行っていた。休憩中実習生に「楽しかった」と伝えてくれた。
- ・インタビュー活動にて、ワークシートを活用しながら参加者同士がしっかりと互いに質疑応答し合い、日本語でコミュニケーションを取っていた。実習生にも積極的に話しかけに来てくれた。
- ・実習生が互いに今すべき行動を観察・把握し、会話をせずとも自然と一体になって動くことができおり、スムーズに活動を進めることができた。

反省点

- ・実習生と日本語で会話したいという参加者の要望を想像しきれていなかった。自由に会話する活動にて、参加者が実習生と積極的に会話しようとする様子が見られた。当初は、参加者同士の会話を促す予定だったが翌日以降は、実習生との会話の時間を増やすこと、実習生が感想を伝えることを意識するよう教案に変更を加える学びを得た。
- ・アイスブレイクの大判かるたのルールをしっかりと作っていなかった。その場で伝える形となってしまう、実習生同士も少し困惑してしまった。
- ・参加者同士が母語で盛り上がりすぎてしまう場面も見られた。実習生は参加者の後ろで巡回していたが、参加者同士の間に入り、一緒に作業をすればより日本語での会話を誘導することができたと考え、明日以降の座席や空間の使い方を見直す反省を得た。

【5日目】8月6日（火）対面 9:30 ~ 12:30

参加者の目標	実習生の目標
<ul style="list-style-type: none"> ・グループでこれまでに勉強した日本の祭りについて振り返る ・理想とする未来の祭りを考え、発表する 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者からの発話を引き出す ・5日間参加して良かったと思ってもらえるように悔いなく全メンバーと話す

3時間	活動内容：実習生と参加者の動き
9:20 ～ 9:30	<p>【1.入室対応（10分）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正門受付2人 <p>9:30</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提出した名簿に、入構時刻を記入し、出欠を確認できるようにする ・名札を配布する ・教室まで案内する ・教室受付2人 ・出欠表の記入 ・しおりにシールを貼る ・トイレに案内する <p>※男性トイレは教室近くに無いため、案内が必要</p>
9:30 ～ 10:00	<p>【2.アイスブレイク（30分）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5日間の総括として、フルーツバスケットの夏祭り版を行う <p>例：夏祭りを勉強した人、盆踊りを踊った人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室後方に円になって座る（椅子：10脚用意） ・デモンストレーションでルールを説明する <p>→椅子を4脚用意し、5人の実習生が実演してゲームのルールを説明する</p> <p>「真ん中に立っている人、〇〇さん。〇〇さんがこれ（紙袋を見せる）の中から紙を一枚ひきます。出します。大きい声で2回、読みます。例：お祭りでラムネを飲んだ人。お祭りでラムネを飲んだ人は立ちます。今立っている人はイスに座りたいです。私（進行者）がベルを鳴らします。立っている人はイスを見つけます。座ります。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルール3つ（走らない、おさない、早く歩くはOK）

	<ul style="list-style-type: none"> 参加者は円形に座り、実習生はホワイトボード前に立つ(色紙を渡すため) <p>○色紙授与</p> <ul style="list-style-type: none"> 実習生1人につき1人以上の参加者の名前を呼び、色紙を渡す 渡す際に、感謝と一言感想を伝える
12:25 ～ 12:30	<p>【 9. 終わりのあいさつ (5分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> 5日間参加してくださった参加者に最後の感謝を伝える 任意参加の「東女見学ツアー・学食を一緒に食べませんか？」の案内をする 授業アンケートの実施は時間の都合上厳しく、メールでお願いすることを伝える <p>※事前に授業アンケートをGoogleフォームで作成し、授業終了後メールを送信</p>
終わり 次第	<p>【 10. (任意参加) 東女ツアー・学食】</p> <ul style="list-style-type: none"> 全員で東女を散策しながら食堂へ向かい、一緒に食事をする 昼食を終えた後、校門まで向かう過程でチャペルを見学する <p>→受付で退出時間を記載し、各自解散、最後のお別れ</p>

良かった点

- 前日の座席や空間の使用法の反省から、実習生が巡回するのではなく一緒になって作業を行うことや実習生を参加者の間に挟む形の座席に変更した。そのため、参加者と実習生の会話を増やすことができ、日本語で話す時間を増やすことができた。
- 4日間実習生が参加者を観察し、各参加者がその日どのような様子だったか共有しあった。そのため、相性などを考慮し、全員が話し合いに参加できるチーム分けを考えることができた。
- これまでの反省を活かし、発表の際には教室の後方を活用し、円形になって発表を行った。全員の顔をしっかりと見ることができ、参加者同士も会話が生まれ非常に良かった。
- 個性溢れるアルバムを作成し、しっかりと日本語で全員に伝えることができた。
- 前日撮影した写真に実習生が一人一人の参加者に対してメッセージを加えた色紙をサプライズで贈呈した。しかし、参加者の方からもサプライズでA4用紙がびっしりと埋まった手紙をいただいた。互いに活動が終わることに対して寂しそうな表情とサプライズのプレゼントに対して非常に嬉しそうな表情が見られ、最高の思い出となる感動的な5日間を迎えることができた。

反省点

- 始まりの挨拶をせずに授業を開始してしまった。授業前との切り替えがうまくいかず、全体のテンションが低いまま授業が始まった。テンションが上がりきらずにアイスブレイクに移行することになり、参加者が少し困惑している様子だった。
- 5日間の感想を話す際、5日間の目標のスライドを入れ忘れ、参加者を待たせてしまった。
- 「行きたい理想のお祭り」の活動にあたって、参加者の間に実習生が座る座席にしたが、7人チームの参加者が途中立って他のチームに移動してしまう場面があった。そのような参加者に対し、実習生がしっかりと隣でコミュニケーションを取る必要があると反省した。

◆実習報告◆

学外実習
(フィールド実践 B・C)

●2024 年度 学外実習受け入れ機関●

実習受入先日本語教育機関

- ・株式会社 インターカルト日本語学校 東京都台東区台東 2-20-9
- ・株式会社ケー・エイ・アイ カイ日本語スクール 東京都新宿区大久保 1-15-18 3階
- ・学校法人 江副学園 新宿日本語学校 東京都新宿区高田馬場 2-9-7

実習期間

受入れ日本語教育機関	実習期間
インターカルト日本語学校	《短期》 9/2～9/18
カイ日本語スクール	《長期》 8/1～9/6
新宿日本語学校	《長期》 7/3～8/8

◆ インターカルト日本語学校 ◆

秋吉里保

黒沼美優

新屋舞衣子

田口華子

中野真帆

乳井祐香里

【インターカルト日本語学校について】（秋吉）

インターカルト日本語学校は1997年に設立された。校舎は、秋葉原駅から徒歩20分、御徒町駅から徒歩10分の場所に位置している。

設立理念として、「CROSS CULTURAL COMMUNICATIONS」を掲げ、「日本語を学びたい全ての人に」をモットーとしている。そして、学習者の「希望を叶える」ことも学校の目標の一つである。そのため、コースや授業が目的別に選択できるよう、多様に設置されており、学習者がそれぞれの学習目的に合わせ、日本語を学ぶことができるようになっている。インターカルト日本語学校に集まる学習者の出身地は、時代によって変化してきたが、現在では65もの国や地域から学習者が集まっている。また、学習者の学習目的、年齢、職業も幅広く、多様な背景を持つ人が在籍している。

【実習内容】（中野）

実習期間は、2024年9月2日（月）から9月18日（水）で、うち土日祝日を除いた12日間参加した。具体的な内容としては、大きく以下の5つである。

1. ホームクラス、漢字クラスの授業見学
2. インターカルト日本語学校専任講師によるレクチャー
3. 目的別授業の参加、見学
4. ホームクラスの教壇実習
5. スピーチコンテストの見学

【ホームクラスについて】（黒沼）

日本語の4技能を幅広く養うためのクラスであり、各自のレベルに合ったクラスを1学期（約3か月間）を通して受講する。学習者の日本語レベルによって初級1-2、中級3-5、上級6-11に分けられており、同じレベルの中でも更に細かくa、b、c…と分けられている。ホームクラスの授業は50分×3コマであり、出欠、ウォーミングアップ、復習、宿題の答え合わせ、文型の導入、パターン練習、応用練習の順で基本的に構成されている。今回の実習ではレベル1-3のクラスの中で実習生1名につき1クラスが割り当てられ、約2週間見学をさせていただいた。最終日にはホームクラスで教壇実習を行った。以下、各自が担当したホームクラスの特徴である。

○J1aについて（中野）

学習者の国籍は様々であり、漢字圏の方と、非漢字圏の方が混合しているクラスであった。真面目で静かな人が多かったが、授業中に質問をされた時やわからないところがあったときは積極的に質問をする人が多いクラスだという印象を受けた。日本に来た理由は様々であるが、日本の大学院進学や日本で就職、日本に今後住みたいという学習者の方が多く、将来を考えて今日本語を学んでいる人が多い印象だった。また、休憩時間などに一緒に休憩に行ったり、休日に遊んだ

話を授業の内容で話していたりするなど、仲のよいクラスだと思った。

○J1b について（黒沼）

高校卒業後すぐに来日した学習者や、社会人を経て来日した学習者など年齢や背景、国籍が様々な学習者が在籍していた。とても明るいクラスであり、授業中は指名される前に積極的に発言をしたり、回答に困った学習者がいた際には他の学習者が応援したり、サポートしたりするなど、一緒に日本語の学習に励む姿勢を感じた。英語圏、中国語圏出身の学習者が多かったが、国籍や母語ごとにグループになって話すのではなく、休み時間はまんべんなくいろいろな学習者と話している印象を受けた。放課後や休日と一緒に出掛けた話もよく聞き、学校での付き合いにとどまらず、プライベートでも友人関係を築いていた。

○J2a について（乳井）

国籍は、中国、台湾、イタリア、アメリカ、マレーシア、ドイツなどで漢字圏と非漢字圏の学習者が混在していた。アニメが好きな学習者や日本で進学するために日本語を勉強している学習者など日本語を学ぶ理由も様々であった。授業態度は非常に真面目で、遅刻や欠席をする学習者は少なかった。クラスの雰囲気としても明るく、誰かが問題を間違えても周囲の人たちが優しくサポートしている様子が見られた。休み時間では、日本語以外にも互いの母語を教え合ったり、年齢や国籍関係なく、仲良く話をしていった。

○J2b について（秋吉）

学習者の国籍は様々であり、漢字圏及び非漢字圏の学習者が混在しているクラスであった。日本語を学ぶ目的は学習者ごとに異なっていたが、「日本で働きたい」「日本の大学に進学したい」という声が多かったと感じる。遅刻や欠席は少なく、クラスの雰囲気としては落ち着いていたが、授業内でよく発言するムードメーカーのような学習者が数人いた。また、授業内で先生に質問されたときに答えられない学習者がいる場面では、学習者同士でフォローし合う様子を時々見ることができた。休み時間は、学習者の母語と日本語を半分半分くらいの割合で会話をしていた。

○J3c について（新屋）

学習者の国籍はさまざまで、漢字圏の学習者が約3分の1を占めていた。英語、もしくは中国語を話せる学習者が多いため、授業中に分からないところをフォローし合ったり、雑談する際はそのどちらかがよく使用されていた。日本語学習の目的は、進学や就職、アニメなどのポップカルチャーに対する関心が主であった。授業後に自主的に質問したり、将来は母国で日本語教師をしたいと話す学習者もいて、全体的に学習意欲が高いように感じた。クラスの雰囲気は明るく活発で発話量も多く、休み時間は何人かで集まって和気藹々と話す様子がみられた。また、他クラスの学習者が遊びに来て輪に加わることもあり、インターカルト全体でコミュニティが繋がっていた。一方、授業内で苦手なことを聞かれた際に「日本語です」と答えた学習者が数人いるなど、日

本語に対して自信なげな場面もあった。

【レクチャー】

実習期間中に、3回レクチャーの時間をとって頂いた。以下では、レクチャーの時間についてまとめていく。

①目的別クラスについて（新屋）

目的別クラスの設置意義や各クラスの特色について教えていただいた。目的別クラスはインターカルト日本語学校独自のカリキュラムで、中級以上の学習者が受講できる選択授業である。学習者は日本語学習の目的に沿って、あるいは自身の興味関心に応じて履修するクラスを決定している。レクチャーを担当して下さった萩原先生によると、目的別クラスは JLPT などの試験対策だけでなくさまざまな分野を取り揃えており、日本語能力の向上とともに人間的な成長を促すことを目指しているとのことだった。また、上手に話せるようになることよりも、考えを深めて自分の言葉にすること、その意見を皆で交換し合うことを重要視していた。

②漢字クラスについて（乳井）

漢字の分類や成り立ちについて教えていただいた。神本先生と実習生 6 人で輪になり、「六書」による 6 つの分類（造字の面から象形文字／指事文字／会意文字／形声文字、用字の面から転注／仮借）やそれぞれの漢字の成り立ちについて学んだ。時々、実習生に対してクイズや問いかけを行って下さったので、実習生も積極的に発言し、考えながら知識を深めた。今後の漢字指導について役立つレクチャーを受けることができた。

③日本語学校・業界について（田口）

校長先生から法改正や福島の日本語学校の成功事例、日本語教育の重要性、日本語教師としてのキャリアといった日本語学校や日本語教師に関する話を伺った。また、自身の異文化体験（入学や転校、上京によって自分の当たり前が通用しなかった経験）についての共有や日本語教師に対する自身や家族の認識について話し合った。インターカルト日本語学校には進学以外の目的を持った学習者がいるため異文化交流に積極的な学習者が多くいることや日本語教師をファーストキャリアとして選択できるようにしたいといったインターカルト日本語学校の特色や日本語教員のあり方について学び、考える時間だった。

【目的別クラス】

・概要（秋吉）

インターカルト日本語学校において、ホームクラスや漢字クラスのほかに設置されている目的別クラスとは、学校が持つ個性の一つである。目的別クラス設置の目的は、学習者の多様な日本語学習目的に対応するとともに、人間的な成長を促すことである。

目的別クラスは、中級以上の学習者のみが履修可能な選択必修の授業である。授業内容は多岐に渡り、試験対策系【ex: JLPT N1 聴解、JLPT N2 文法 etc】、ビジネス系【ex: 時事（新聞・視聴覚）、ビジネスニュース etc】、教養系【ex: 生と死と私たち、大人の対話 哲学カフェ etc】、実力アップ系【ex: プレゼンしよう、発話トレーニング A etc】、就活知識系【ex: 就活サポートプログラムー就職活動の基礎ー】と幅広いジャンルのクラスが展開されていた。数ある目的別クラスのなかで、「生と死と私たち」「アクティブジャパニーズ」「プレゼンをしよう」「就活サポートプログラム」「日本の地理」「絵を見て話そう」「楽しい漢字」の7つの授業を見学させていただいた。以下に、7つの授業の概要をまとめる。

・生と死と私たち（秋吉）

このクラスでは、現代のトピックから命・生・死について考え、話し合うことを目的としている。内容は、重いものを扱い、戦争や自殺、臓器移植など、毎回の授業ごとにトピックは変化する。今回参加させていただいた授業では、1923年9月1日に起きた関東大震災の話題から始まり、「正常化バイアス」「災害弱者」の言葉が紹介された。後半では、映画「風立ちぬ」の関東大震災シーンを視聴した。そして、関東大震災後に起きた「虐殺」が取り上げられ、「デマ・流言」について説明がなされ、最後にコメントシートを提出して終了した。

関東大震災後に人々が混乱している中で起こった朝鮮人・中国人・日本人に対する日本人による虐殺については、日本の教育機関においてはあまり語られることがないトピックである。このようなトピックを日本語学校で扱っているということに驚いたとともに、この歴史は、海外から日本に来ている学習者にとっては無関係ではないことなのだと、授業を通じて自身も気づかされた。「関東大震災」という一つのトピックから、様々なキーワードに繋げて非常に深い内容の授業が構築されていると感じた。

・アクティブジャパニーズ（中野）

このクラスは、机やペンを持たず、いわゆる授業のような形式ではなく、身体を動かしながら、日本語を使って楽しむことを目的とした授業であった。参加者は、自分のニックネームが書かれたカードを首に下げ、授業に参加していて、どの活動にも積極的に参加していた。参加させていただいた授業では、山手線ゲームのような「イメージゲーム」や「小さいものしぼりゲーム」のような簡単な単語の意味を学習者の方に改めて学んでもらう趣旨のゲームを行っていた。

一方、机に座ってグループになって、自己紹介をしたり、自分の得意、不得意なこと、また自分が尊敬している人を紹介する内容もあり、授業ごとによって大きく内容が変わる授業であり、とても新鮮な授業である印象を受けた。

・プレゼンをしよう（黒沼）

このクラスはテーマに基づき1人5分程度のプレゼンテーションを行うという話すことに重点が置かれた授業である。今回のテーマは「私の国の〇〇」であり、パワーポイントを用いたり、ホワイトボードを使用したりと各々が自由なスタイルで発表をしていた。発表者は原稿を丸ごと見ながら話すのではなく、聞き手のほうを見ながら笑顔で話していた。また、発表者が話したことに対して声を出してリアクションを取るなど聞いている学習者の態度も素晴らしく、外国語を話すことへの抵抗が和らぐような雰囲気が形成されていた。私たちは次回のテーマである「私の名前の由来」についてプレゼンテーションを行った。

・就活サポートプログラム（新屋）

このクラスは、主に日本で就職予定の学習者が受講し、就職活動で役立つ実践的なプログラムが組まれている。内容は面接対策や履歴書作成の仕方、求人への応募方法などである。今回は私たち実習生が面接官となり、数人ずつ（実習生は各グループにつき1人）に分かれて面接の入退室の練習を行った。その後は質疑応答コーナーが設けられ、日本における就職活動に関して、学習者と互いに気になることを質問し合った。入退室の練習は数回実施したが、どの学習者もアドバイスしたことをすぐ改善し、最終的に完璧に仕上げている。また、質疑応答の際も活発に質問が飛び交い、意欲的に就職活動に取り組んでいる印象を受けた。

・日本の地理（乳井）

この授業では、「日本の47都道府県について学び、地名と場所を理解し、日本のニュースに対応できるようにする」という目的がある。授業の前半では、「沖縄県」について気候や特産物など様々な観点からどのような場所なのか学んだ。授業の中盤からは、それぞれの出身地について各々5分ほど紹介を行った。実習前のオリエンテーションの段階で、出身地を尋ねられ、それぞれ紹介する都道府県の担当を決定した。東京出身の実習生は、祖父母の家がある県や観光で訪れた県を紹介した。学習者は、3人の少人数クラスでアットホームな雰囲気であった。日本の地理の授業よりも学習者の興味や関心に寄り添った内容で、私が学習者の立場であったら受講したい授業だと感じた。

・絵を見て話そう（田口）

このクラスでは「日本の習慣をたずねる」というテーマに基づいて、イラストから会話を作るペアワークを行っていた。①～⑩のイラストのうち初めの①～④までを教師が説明し、全体で描かれている状況を確認する。そして、残りのイラスト（⑤～⑩）をそれぞれのペアにわかれて話し合い、会話を完成させるという流れで行われていた。会話完成後は、CDでモデル文を聞き、自分たちの文との比較や表現の確認、日本の結婚式にまつわる文化について教師が説明していた。学習の雰囲気はとても活気があり、会話を完成させようとペアで協力していた。また、日本の習慣を知るだけではなく、自身の国の習慣を伝えることにも非常に積極的であった。実習生は学習者のペアに入り、会話作成の補助を行った。学習者の持っている力で文を完成させるようにという指示をいただいていたため、どの程度まで教えるのがよいのかの見極めが難しかった。

・楽しい漢字（黒沼）

この授業は非漢字圏の学習者に向けたクラスであり、参加させていただいた日はパーツから熟語をつくるという活動が行われていた。たとえば先生が「トハ女米女口」という漢字のパーツを示し、そこから「点数」という熟語を推測するというものである。また、「ㇿ」「弓」「言」など示されたパーツを用いる漢字をできるだけ多く書き出すという活動もした。「寝」という漢字を説明する際には、うかんむりの内部を左に 90° 傾けると横たわって寝ている人のように見えるなどイメージと結びつけて説明していた。漢字はパーツから成り立ち、漢字は一つ一つ意味を持つといった漢字の特性を楽しく教えていた。

【漢字の授業】

漢字クラスは、母語が非漢字圏か漢字圏かでクラス分けされて行われていた。

・漢字圏クラス（乳井）

漢字圏のクラスでは、中国語母語の学習者が多く、主にプリントを使用して授業を行っていた。漢字とスライドのイラストや写真で新出漢字のおおよその意味を理解していた。「臨死体験」など日本語でも難しい言葉も説明なしで理解しており、漢字でおおよその意味が理解できる漢字圏である学習者ならではの授業であると考えた。授業の様子は、学習者への質問や対話を大切にしている印象で、学習者から先生への質問も活発であった。

・非漢字圏クラス（田口）

非漢字圏のクラスでは、漢字圏出身者以外の学習者で構成されている。見学日は「細」・「太」・「狭」・「浅」・「深」・「静」・「涼」の 7 つの漢字の学習をしていた。授業の冒頭で日本で有名な食べ物について学習者に質問していた。学習者から返ってきた「ラーメン」を取り上げ、麺の細さから「細」・「太」の漢字の学習につなげていた。次の漢字に移る際は「反対語は何？」と聞いてつなげていた。漢字の説明では、漢字圏のクラスよりも漢字の形に注目し、糸と田のパーツをくっつけて「細」というように教えていた。漢字を一方的に教え、書く練習をひたすら行うのではなく、コミュニケーションを交えて使い方も教えていたことから、学習者も退屈せずに、生き生きとした様子で学んでいた。

【スピーチ大会】（中野）

9月18日（水）に「第43回 インターカルト日本語学校スピーチ大会」が開催された。クラスの代表者12名が牛込筆筒区民ホールでスピーチを行った。スピーチのテーマは日本で生活する中で興味関心を持ったことや自国と日本の文化の違いや、生きがいや好きな趣味をテーマにした内容など、多岐にわたっていた。

以下に、テーマと出場者の出身地を記す。

「溶け込む」 イギリス
「チョコレートの味」 モンゴル
「新しい趣味を探そう」 アメリカ
「プリキュアから教えてもらったこと」 香港
「日本の会社はこんなところ！」 タイ
「翻訳できない日本のレアリア」 イタリア
「炭水化物中毒」 香港
「「こわがり」やめます」 タイ
「早口言葉」 アメリカ
「人生の決断」 タイ
「四ツ目」 イギリス
「ネズミ」 香港

私達実習生は、実際に会場でスピーチ大会に参加し、「東京女子大学」という枠で、出場者の中から1～3位を選ぶ投票も行った。事前に提示された評価シートに基づいて、メンバーの中で多数決で、投票する出場者を決定した。会場は、出場者を応援しに来たクラスメイト達が多く来ていて、スピーチ前後に声を出して盛り上げることはもちろん、スピーチ中にも出場者を励ましたり、リアクションをとったりするなど、会場全体でスピーチ大会を楽しんでいた。

最優秀賞、優秀賞、学生賞、クラス代表賞（全員）などが表彰され、受賞者には賞状やトロフィー、景品などが贈られていた。また、ネクステージ賞や凡人社賞、イーオンホールディングス賞などの協賛企業の賞では、代表の方の講評と共に、企業から景品が贈られていた。スピーチ大会を通して、学習者の方が、日本語を学んでいる理由、これからの目標、これからも大切にしたい自分の信念や趣味について、日本に来て感じたことなど、真っ直ぐに話されているのを見て、自分たちのことについても改めて考えてみようという気持ちになり、感動するスピーチばかりであった。文章の構成や音のアクセント、イントネーションはレベルの違いがわからないほど、たくさんの練習を重ねてきたことが伝わってきた。また、ジェスチャーや間の取り方などで自分の気持ちや想いを伝えようとする意思や笑顔で楽しんでスピーチをしている印象を受けた。正しい文法や言い回しももちろん大切だが、それ以上に自分が伝えたい想いを大切に、スピーチに取り組んでいる印象を受け、これはインターカルト日本語学校のスピーチ大会の特色であると感じた。学習者はスピーチ大会の経験によって、日本語の「表現力」や「文章構成力」の向上や、日本語学習のモチベーションアップに繋がると感じた。

【教壇実習】（乳井）

私たちは、インターカルト日本語学校の登校最終日に、各ホームクラスにて教壇実習を行った。

J1a クラスでは、「意見」、J1b クラスでは、「推量」、J2 クラスでは、「～のに」、J3 クラスでは「V てくる・V ていく」の導入部分を 20 分間行った。

第 1 週目の金曜日に、教案の作成方法や教壇実習について島崎先生からお話をいただき、2 週目の木曜日に Zoom で各々の教案相談をさせていただいた。(J1、J2 を島崎先生、J3 を坂本先生) J2 と J3 は、ホームクラスは異なるが、同じ内容を担当するため共同で教案を作成した。授業外の時間でも、インターカルト日本語学校の先生方に質問させていただいたり、実習メンバー間での相談や互いに先生役・学習者役となって本番と同じ流れで教壇授業の練習を行い、教壇実習本番への準備を念入りに行った。

以下、実習で行った事や実習を通して気づいたこと・感じたことを各々で記述する。

(1) J1a クラス「～と思います (意見)」(中野)

「～と思います (意見)」は「みんな意見が違う、答えは一つじゃない」という意味であることが伝わるように、学習者の方に興味を持ってもらえて、様々な意見が出るようなトピックを導入で用い、引き出したい返答に応じて当てる学習者の計画も行った。しかし、実際に教壇実習を行うと、学習者からの予想外の返答に対し上手く返すことができなかつたり、緊張してタイミングをつかむことができず、板書を上手く使うことができなかつたりした。教壇実習から、予想外のことに對して準備する大切さ、また学習者と双方向のコミュニケーションをとりながら授業を進める楽しさを感じる事ができた。

(2) J1b クラス「～と思います (推量)」(黒沼)

普通形を一緒に確認しながら、「～と思います」にするのか「～だと思います」にするのか使い分けを理解してもらえような導入を考えた。教室全体を見て学習者の発話量が均等になるように指名する事ができた。しかし立ち位置や手の位置、体の向き、ホワイトボードの板書のレイアウトまで考慮できておらず、私自身が戸惑ってしまったことで学習者のことも不安にさせてしまった。ただ話すだけでなく、本番と同じように立って動きながら話す練習も必要だったと反省した。

(3) J2 クラス「～のに」

○J2a クラス (乳井)

学習者が楽しんでもらえるような話題や身近な話題、発話量を増やすことを意識して教案作成・授業準備を行った。教壇実習の前には、ホワイトボードを使用し、他の実習生に学習者役になってもらい互いの練習を行った。しかし、実際に教壇実習を行うと、緊張から早口で話してしまい、時間より少し早く終わってしまった。また、パソコンを操作しやすい場所に立っており、事前に考えていた指名する学習者も立ち位置周辺の学習者になってしまったことや注目してもらいたい箇所もさらっと進んでしまったという改善点がある。今回の実習を通し、状況に応じた適切な日本語教育の実践の場を作ることの難しさを学んだ。

○J2b クラス (秋吉)

教育実習序盤にて加藤校長先生に教えていただいた「なぜ？」を大切にしながら、教案作成及び授業準備を行った。教案内容で特に重視したのが、学習者にとって身近もしくは関心を持てる話題かという点である。インターカルト日本語学校の授業を見学していると、「恋愛」に関するトピックで盛り上がる場面が多く見られたため、その話題は必ず入れようと考えていた。結果として、「トムさんはハンサムなのに、恋人がいません」の際にかなり盛りあがったと感じている。反省点としては、教案作成にできる限り時間を使って変更を加えたことで、全体のインプットができておらず、途中途中で教案を見て授業の流れを止めてしまったことである。また、学習者の発話を促すという点を意識してはいたものの、緊張から学習者の発話を待たずして自身が言う場面があった。今回の実習を通じ、準備の大切さと考えたことを実行できる嬉しさを学ぶことができた。これは日本語教育に限らないものであり、今後の人生においてこの学びを役立てていきたい。

(4) J3 クラス「Vてくる・Vていく」

○J3b クラス (田口)

学習者にとって興味関心が高い内容や答えやすいトピックを意識し、アイスブレイクの部分から導入で用いるトピックの選定を行った。授業見学をして感じた、授業で盛り上がる瞬間やテーマを振り返り、どのような例文や題材であれば学習者の関心を引く導入が出来るのかということ考えた。実際の教壇実習では、見学で「虫」をテーマにアイスブレイクをしていた際にかなり盛り上がりを見せていたことから、導入で「虫が入ってきます」を用いて導入を行った。結果として、「虫は嫌いですか？」や「虫が入ってきたらどうしますか？」といった問いかけに対して、スムーズに反応を得ることが出来た。しかし、教案を見るために目線が下になってしまったことで授業の流れが止まってしまったことや想定外の返答が返ってきた際の対処は上手くできなかった。また、学習者の方から予定よりも早い段階で板書を求められたり、「Vてくる・Vていく」の発音が似ているためもっと強調して発音して欲しかった」というお声をいただいたりした。教壇実習を通していただいた貴重な意見を活かし、今後日本語学習者と接するうえで心がけていきたい。

○J3c クラス (新屋)

”全員が参加している意識を持った授業をつくる”という目標設定の下、教案作成と準備を行った。こちらから質問する際には全体に大きく投げかけるのではなく、個別に何人か指名することでなるべく多くの学習者が発話する機会を作るようにした。実際の授業では、それらの質問から会話が弾み、双方向の活発なコミュニケーションに繋がった。また、流れ自体は教案通りスムーズに進んだことで、20分という時間を最大限有効に使うことができていた。一方で、事前に予想していたものとは異なる学習者からのレスポンスに戸惑った場面や、立ち位置や教材の使い方・板書の仕方など、改善すべき課題も残された。咄嗟の対応力や学習者に楽しいと感じてもらえる授業づくりはまだ身につけられていないため、今回の実習とその反省を通して自ら学び、次に活か

していきたい。

【付録】（新屋）

実習中の一日のスケジュール例

（例1）

13:25～14:15	漢字クラス 授業見学・参加
14:25～16:15	ホームクラス 授業見学・参加
16:25～17:15	目的別クラス 授業見学・参加
～17:30	フィードバック

（例2）

10:15～12:05	J5a クラス 授業見学・参加
12:15～13:05	目的別クラス 授業見学・参加（実習生プレゼンテーション）
～14:15	昼休憩＋午前クラスフィードバック
14:25～16:15	ホームクラス 授業見学・参加

◆ カイ日本語スクール ◆

唐崎千香子

小林南瑠

竹川奈々

中田有咲

1 実習の概要

■期間：

8月1日(木)：オリエンテーション

8月8日(木)：動画教材作成進捗報告

8月20日(火)：フリートーク

8月22日(木)：動画教材作成進捗報告

8月26日(月)～9月6日(金)：授業見学&フリートーク

* 対面実習は、20日と、26日から5日の計10日間。土日は実習無し。

■時間：

1・2・3レベル→(午前)9:00～12:45(午後)13:40～17:25

4～8レベル→(午前)9:00～12:50(午後)13:40～17:30

4時間・2時間のまとまりごとに授業見学

記録シート記入(1回につき90分、3日以内に行い毎回連絡する)

■形式：

対面(8月30日のみ台風の影響によりオンライン)

■内容：

▶授業見学

実習前に各自見学したいクラスを指定クラス・参加希望クラス・フリートークから選択。実習期間は選択したクラスの見学を行った。実習生一人一人のスケジュールは異なるが、週3～4日授業に参加した。

▶動画教材作成(2人1組)

タスクシラバス、文型シラバスの動画教材(10分程度)をペアで1人1本ずつ作成。

2 カイ日本語スクールについて

2-1 カイ日本語スクールの概要

■カイ日本語スクールについて

1987年設立

定員280名

2011年 東日本大震災～ICTに移行

2012年 教材デジタル化開始

2015年 学生全員にiPad貸与

2020年～2023年

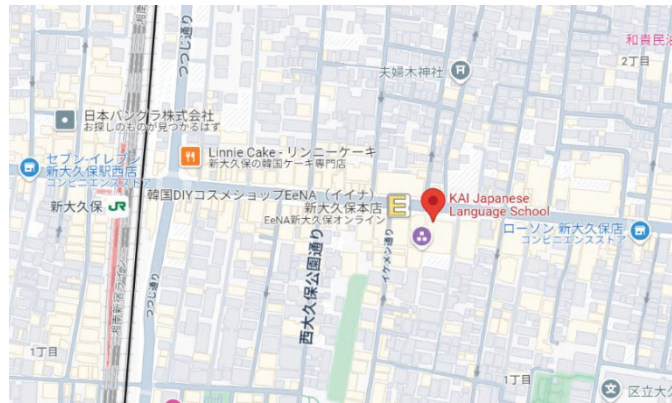
コロナ禍～全面オンライン→ハイフレックス

2023 年～ 認定日本語教育機関申請に向けて新カリキュラム試行開始

■学校所在地

住所: 〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-15-18 みゆきビル 3F

TEL: +81-3-3205-1356



Google マップ

■教育理念

・日本語教育を通し、ポードレス時代に求められる柔軟性を涵養し、相互理解、文化理解を深める

■教育目標

- ・日本語の 5 技能を総合的に身につける
- ・日本語コミュニケーションの特性を理解し、人間関係を構築できる能力を身につける
- ・自律的に学ぶ学習態度を形成する

■KAI の意味

[kai] ; カイという音を持つ漢字には、開 (open)、快 (comfortable)、解 (understanding)、界 (world)、会 (encounter)、海 (ocean)、改 (innovate) などという意味がある。

→ 「広く世界中の人々と出会い共に学ぶ環境で、日本語だけでなく相互理解のためのコミュニケーション方法も身につけてほしい」という願いと、「より良いコミュニケーション教育のために常に開発・改良を行い、学習者に提供していく」という教師、スタッフの姿勢を象徴している。

■状況と考え方の変化

- ・教師の役割

2020 年まで：教授活動中心

現在：支援活動中心

・必要なスキル

2020年まで：文法中心の構造シラバス、ICTの使用、学習者オートノミー育成、著作権

現在：タスク中心型シラバス、効果的なICTの使用、学習者オートノミー育成、著作権（公衆送信権を含む）

タスク中心型シラバス 効果的なICTの使用 学習者オートノミー育成 著作権（公衆送信権を含む）

■講師について

講師歴10年以上の講師から若い新人講師まで幅広く在籍。

10年以上・・・42.6%、5～10年・・・24.1%、5年未満・・・33.3%

2-2 学校の特徴について

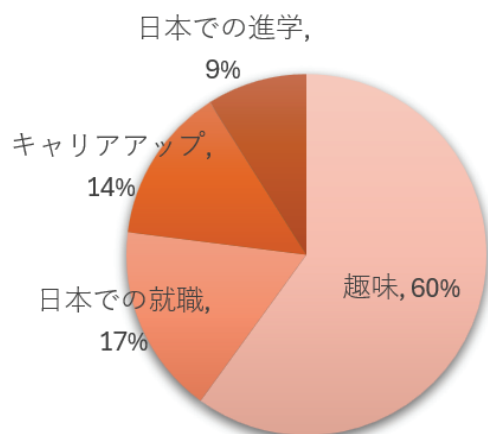
■留学目的

趣味：60%

日本での就職：17%

キャリアアップ：14%

日本での進学：9%（通常の日本語学校では最も多くなる）



(図1)

■年齢層

15～19歳：17%

20～25歳：32%

26～30歳：22%

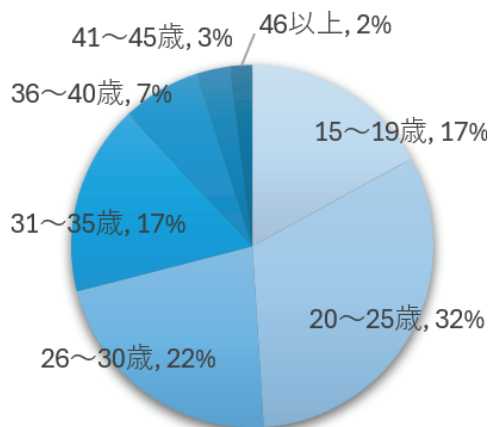
31～35歳：17%

36～40歳：7%

41～45歳：3%

46歳以上：2%

→年齢層が高い＝ニーズははっきりしているが、要求のレベルが高い。



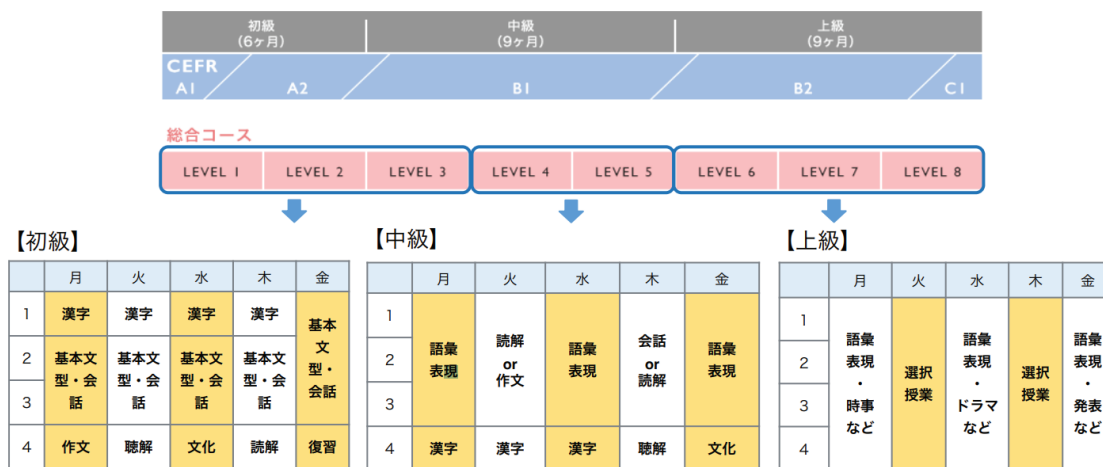
(図 2)

■学習環境

はたけ&Discord→文字/音声/動画データによる教材・宿題等のやりとり・校内連絡ツール ipad を活用し、反転授業を取り入れている。

■配属クラスのカリキュラム

コースとレベルクラスは、2～3人のチームティーチング体制



(図 3)

■授業時間

▶ 1・2・3 レベル

* 午前クラス 9:00-9:45 10:00-10:45 11:00-11:45 12:00-12:45

* 午後クラス 13:40-14:25 14:40-15:25 15:40-16:25 16:40-17:25

▶ 4～8 レベル

* 午前クラス 9:00-9:50 10:00-10:50 11:00-11:50 12:00-12:50

* 午後クラス 13:40-14:30 14:40-15:30 15:40-16:30 16:40-17:30

■日本語総合コース

半年から2年かけて高いレベルの日本語を身に付ける留学ビザ取得可能な日本語コース。日本での就職や大学、専門学校への進学、日本語能力試験 N1 合格など、学生の目的はさまざま。

初級 (初級1、初級2)	初級では基礎文法句型をしっかり習得し、日本語の組み立てを徹底的に理解します。
中級 (準中級、中級1、中級2)	6か月後からは、コミュニケーション技能習得を中心に、表現のバリエーションを学び応用力を身に付けます。(より社会的話題への発展／文法強化／語彙力増加／漢字1000字)
上級 (準上級、上級1、上級2)	1年後からは、論理的な日本語力や、人間関係構築のための高度なコミュニケーション技能獲得を目指します。また、コミュニケーションだけでなく、日本語の総合的な技能／内容が効率良く学べるように選択制を導入していますので、それぞれの目的や技能の違いも気にすることなく学べます。(表現力・論理力強化／専門課程への準備／漢字2000字)

(図4)

■コース

- 1学期：10週間（50日間）
- 授業日：週5回（月～金）
- 1レッスン：1～3レベルは45分、4～8レベルは50分
- 1週間のコマ数：20時間：9：00-12：50 または 13：40-17：30
- クラスサイズ：最大16名
- 入学：年4回（1月、4月、7月、10月）
- 入学資格：18才以上および高卒または同等程度

2-4 学習者の特徴

■国籍比率

特定の国に偏らないバランスのとれた国籍比率を維持し、今も40カ国以上の学生たちが日々日本語学習に取り組んでいる。

2024.06.25. 現在33カ国

ヨーロッパ：48%

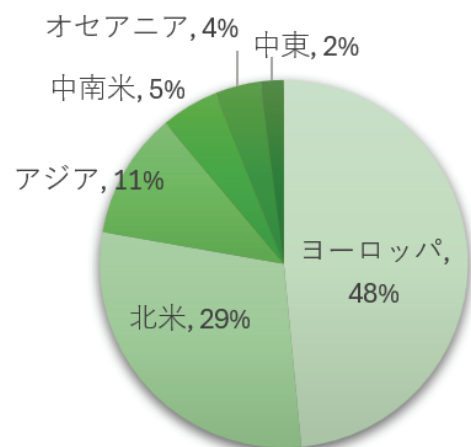
北米：29%

アジア：11%

中南米：5%

オセアニア：4%

中東：2%



(図5)

3 授業について

3-1 授業の概要

今回の実習では、指定クラスと参加希望クラスの授業見学を行った。また、フリートークにも参加した。午前または午前の 2~4 コマ連続で参加し、授業ごとに見学記録の記入を行った。授業見学と見学記録の記入を合わせて 22 時間以上になるように自らスケジュールを組んだ。

指定クラスは、事前に提示された[月~金 9:00~12:50 / 13:40~17:30]の授業から各自がスケジュールを組んで参加するクラスである。

参加希望クラスは、講師からの依頼を受け、授業内容や実習生の役割を理解した上で参加するクラスである。

フリートークは、3 ヶ月に 1 回各レベルで行われ、自由なトピックで、2 人組と日本語話者のサポーターが会話練習をするクラスである。

3-2 指定・参加希望クラス・フリートークについて

ここでは、指定・参加・フリートークを通じて学んだことをレベルごとに、学習者、教師側の観点から述べる。

■ 1 レベル

学習者

来日前に少し学習をしているか否かによって 1 レベルでも差があると感じた。休み時間は一切日本語が聞こえてこず、英語だけだった。また授業中もペアで相談する時に英語で話し、未だ日本語で思考する感覚が身に付いていないと推察する。そして、休み時間の談笑中、「から 1 月まで 8 月」と表現している学習者がいた。このように、「私は」で〈名詞+助詞〉の流れを学習しても、それを他の文法に応用するまでには至っていないというのが 1 レベルの特徴であると感じた。シャドーイングの場では、流暢に且つ、即時にリピートすることはまだ難しいようだった。

教師側

喋るスピードが他のレベルにくらべ圧倒的にゆっくりであることと、同じことを 2 回 3 回と繰り返すことが特異な点だった。また、これは教師によっても教授法が異なるが、英語を適宜使用する教師が多かった。さらに一つ一つの言葉というより「まとまり」を意識する VT 法をはじめ、ジェスチャーやリズムアクティビティなど身体を使って記憶に残る学習方法を取り入れていた。他のレベルと比較し、学習者があらゆる場面で躓き、その説明に時間を取られる為、想定していた教案通りにはいかない様子が見受けられた。1 レベルこそ余裕をもった教案作りが求められると考察する。

■ 2 レベル

学習者（指定クラス・フリートーク）

指示に対して日本語で自分の解釈が正しいか質問したり、新しく学んだ言葉の品詞を気にした

りと、1レベルに比べかなり日本語が上達しているようだったが、逆にまだまだ英語を使いがちな学習者もあり、クラス内でのレベル差を感じた。英語を書き起こすカタカナの練習では、英語の発音とカタカナの発音がなかなか合致せず、苦戦しているようであった。漢字圏の学習者にとっては自国のカタカナのような言葉もあるそうで、どここの出身だとしても難しいことを学んだ。また、フリートークでは、前日に会っている実習生に対して、「久しぶりです」「初めまして」と挨拶をする学習者が多かった。あまり意味を考えずに、挨拶といえばこの形と覚え込んでいる様子だった。挨拶のように型が決まっている言葉だと、何故その単語を使うのかまでは考えずに話してしまっていると考察する。

教師側

タスクベースでの授業が展開されていた。タスクが達成されることを重視するため、学習者の使う日本語に明らかな間違いがあることを発見した時も、タスクが達成されていればその場で指摘することはせず、どのようなミスをしていたかなどはメモに控えて置き、後日全員に配布されているタブレットで各自にフィードバックを送るというシステムで行われていた。ただ、このシステムだと、見落としがあったり、フィードバックが多くなりすぎて学習者が混乱してしまったりすることも考えられるので、まだ課題があると感じた。2Mのクラスは特に活発であり、担当教師が休憩時間など、学習者に積極的に話しかけ、アットホームな空気を作っていることがうかがえた。

■3レベル

3レベルの指定クラスは台風の影響により、ハイフレックスクラスにオンラインで参加した。

学習者（指定クラス）

休み時間に話しているときは基本的には日本語を使用し、説明が難しいときに英語を使用していた。また授業中にペアで話す際には、得意な学生が授業内容を英語で説明した後に日本語でペア練習を行っていたことから、クラス内の理解度に差があると推察する。ペアワークで繰り返し練習したり、理解を補いあうなど学校で学ぶ良さが発揮されていたし、モチベーションが高く保たれていると感じた。

教師側

新しい漢字の導入では、部首を「音符」と呼び、同じ音符の漢字をまとめて2つから4つほど学習していた。学習する漢字は日本の学校で学ぶ順番とは異なり、日常生活での使用頻度が高いものを優先していると考えられる。教師はオンラインで参加している学習者が教科書を見ているのか何か調べているのかなどがわからないため、学習者の理解を把握するのが難しいと考察した。また、休み時間には電子レンジの話をしたり、台風に関する注意喚起など、日本での生活を支える役割も担っていると感じた。

学習者（希望クラス）

スムーズに話すということは、流暢に話すということではない。質問に正しく答えたり、聞き直すなど、会話を続けることが大切であると指導されていた。その上で学習者は、「良い質問ですね！」などと言葉にすることで、理解していることを示す工夫をしていた。また、友達言葉で会話をする練習の中で、スピーチスタイルの使い分けを徹底し、ですます調と混ざらないようにと指導されていたが、友達言葉で話すことに慣れていないようで、言い直しも多く見受けられた。また、友達言葉の会話で、終助詞を積極的に使うようにとの指示があったが、会話の中では辞書形の形で終わることが多かった。

教師側

アイコンタクト、ジェスチャー、繰り返し表現が多い。一方、語彙のコントロールは少ない印象があり、会話練習のクラスであるため、話し方も実際の会話に近くなるよう工夫をしているのではないかと推察する。会話練習の前に、「フォーマル(謙譲語)」・「失礼じゃない(ですます)」・「カジュアル(友達言葉)」の3種類のスピーチスタイルの説明を図を用いて行い、今日はカジュアルな話し方をしてくださいと伝えることで、場にあった話し方の練習ができるようにしていた。

■4 レベル

学習者（フリートーク）

学習者の会話レベルは最初の予想よりも高く、話の流れにスムーズについていけていたことから基本的なリスニング力も語彙力もあると感じた。一方で発話に関しては個人差が大きく学習者の性格も大きく関わっており、特に学習者が理解できなかったときに聞き返さずに流すことが多くあったため、話す際に学習者に合わせて対応する必要があった。文法は間違えていることも多くあったが、タスクベースで学習しているため話すことに自信がついていて黙らずに積極的に話すことができていると考察できた。

教師側

話す際にスピードは私達と大きく変わらなかったが、表情が大きく豊かで、声も張ってはいはっきりしていたため、学習者の理解のしやすさはスピード自体より話し方だと感じた。また、学習者と話すうえで伝わっているときと伝わっていないときでそれぞれ正直に伝え、伝わっていないときはどこがわからないかをはっきり伝えることが大事だというフィードバックをいただいた。そこから特にフリートークの際は、教師はコミュニケーションを客観視する力が必要であると学んだ。

■5 レベル

学習者

読解練習において問題の答えは合っているにもかかわらず、実際は文章全体の30%程度しか理解できていないと言っていた。知らない言葉が多いことが理由だそう。早く終わった人は、早く終わった人

用の問題を解いていた。お願いをするというタスクを達成するための日本語だけでなく、遠回しの言い方や気遣いに重点をおいて試行錯誤していた。それぞれの国の文化と比較し、相手を褒めてから指摘をしたり、遠回しにお願いをする日本文化特有の表現には違和感があると感じている人が多く見受けられた。

教師側

説明の際には時折英単語を交えていたが、繰り返しは少なかった。また、単語の解説の際には、1つか2つなるべく身近な例と一緒に伝えていた。会話の練習では、日本人ならでの、褒める→注意→配慮という流れを説明し、その上で皆さんの国ではどうですか？と聞くことで、それぞれの学習者の文化の違いに関しても学び合うことができる機会を設けていた。

■6～8レベル

学習者

1人が8レベル、3人が6レベルの4人で構成されているクラスだった。休み時間も日本語を使用していたのが印象的だった。1分間話す課題で私達日本人であっても難しい課題だったが、学習者の方はなんなく出来ていた。短時間の準備時間で話すネタや構成まで考え、話しながら語彙選択をしているのではないかと推測する。即時に自分の言いたいことを言葉・文章に出来る点は上級者の特徴だと言えよう。しかし、上級者だからこそ、“分からない”に気付きにくいと感じた。学習者自身が何を苦手としているのかを明らかにする必要があるのではないか。

教師側

学習者の語彙エラーに対して、暗示的、且つアウトプット誘発型を使用して自ら間違いに気付かせ訂正させるという手法を取っていた。また、説明をする際や少し難しい単語が出てきた時には、学習者に意味を尋ね、学習者同士の学び合いの雰囲気醸成していると感じた。学習者に香港、台湾の方がおり、統治問題にも言及していた。日本語力がついてきたことでより深い話が出来ようになったという事だが、教師側は一層、文化的背景への配慮が求められると学んだ。

4 映像教材作成について

学習者が地震に備えることが出来るようになる動画を目的とし、タスクシラバス、文型シラバスの動画教材（それぞれ10分程度）をペアで1人一本ずつ作成した。

8月8日（10：00～12：00）、8月22日（10：00～12：00）は実習担当の先生も含め動画教材の作成準備にあたった。その他ペアごとに集まり推敲していった。9月6日（10：00～12：00）に実習担当の先生に発表をした。

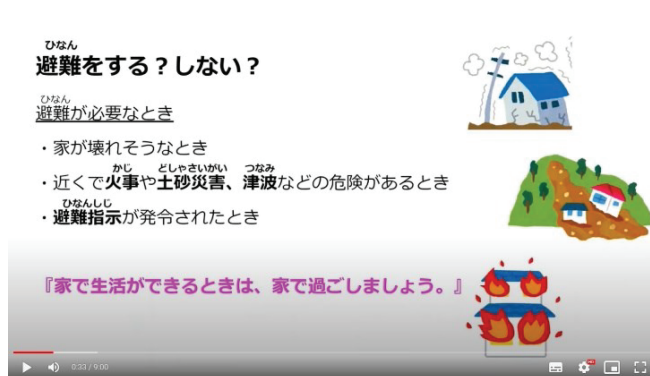
4-1「防災バッグを用意しよう」について：タスクシラバス 担当：唐崎千香子

(図6,7)

中田とのペアで動画を作成した。この2本の動画を通して、避難に際して必要な防災バッグを用意することができるようになることを目標とした。私はタスクシラバスを担当し、ペアの中田は文型シラバスを担当した。タスクシラバスでは主に、状況に応じた避難の必要性の有無から、避難に関する用語、ニュース画面での避難に関する指示について紹介した。そして、避難が必要な際に持っていくべき防災バッグに関して、この動画を見ながら準備をしてもらえるよう、実際の防災バッグを用いて紹介をした。文型シラバスでは、タスクシラバスで紹介した防災バッグの中身として必要なものを準備するために、実際にお店にてどのような表現を用いるべきか、会話練習を行うことができるように作成した。

動画作成に際して工夫した点は、第一に構成である。約10分の動画で、スライドのみを用いて説明を行うだけでなく、前半はスライド、後半は実物を写しながら動画を撮影し、飽きずに10分間集中して観られるような構成を考えた。

前半は、どのような場合に避難をすべきか、どのような場合は家で過ごすことが安全か、避難所という場所をイメージしづらいであろうことを前提として、状況に応じた避難の必要性の有無の説明を行った。また、特に難しい単語や、地震によって起こり得る様々な二次災害に関する単語に関しては、イラスト等を用いながら詳しく説明を行うことで、状況をイメージしやすいよう



(図6)

ように工夫をした。次に、避難指示が出された場合のニュースの画面を用いて、得られる情報の種類や、そこからどのように行動すべきかを説明した。高台に逃げることや、避難所へ行くこと等、どのような場合にどのような行動が求められるのか、起こりうるケースと語彙に関して説明を行った。

後半は、実際に防災バッグから中身を取り出して紹介し、使い道も合わせて記載することで、なぜ必要か、どのようにして使用するのかをイメージしやすいように工夫をした。



(図7)

4-3 「地震が起きた！あなたはどうする？」について：タスクシラバス 担当：竹川奈々

(図10, 11, 12)

私は小林とペアを組み動画を作成した。私達は地震発生後を取り上げ、のちに記述があるが、小林は「避難所での生活」の動画を主に担当した。今回、私が主に担当したタスクシラバスの動画は、地震が起きた時にしてはいけないをしないということが出来るようになる、ことがタスク（目標）であり、そのタスク達成の為にしてはいけない理由を分かりやすく、記憶に残るように作成した。地震はいつ来るか分からない。世間一般では、地震発生時に「したほうがいい」ことが多くあり、それは地震に不慣れな外国人にとって判断が難しいものであると感じた。今回はいつ何時も「してはいけないこと」は共通していると考え、それを伝えるものにした。本動画は、動画の目標、動画の流れ、してはいけないこと8つを理由と共に紹介という構成になっている。随所で、言葉の説明や日常使いできるアプリの紹介、津波の危険度の説明、を入れて

動画作成において工夫した点がいくつかある。まず1枚のスライドにしてはいけないことは2つまでとした。また、「してはいけないこと」「その理由」「イラスト」の3つで構成することによって、動画を見ながらメモを取りやすい形にした。

次に、記憶に残りやすい工夫だ。解説のナレーションを入れる際は「早く避難したいですね。でも・・・」と共感を示すことを心がけた。また、津波の怖さを知ってもらう為に、高さに比例した津波の威力を写真と共に紹介した。そして、8つをただ紹介するだけでなく、実用できるよう、アプリの紹介も取り入れた。



(図 10)

タスクシラバスとは本来何かが出来るようになるものであるが、今回私は「しないということが出来るようになる」を目標に掲げたことで、実際に学習者ができるようになったのかは地震が発生してからではないと判断出来ない、そこに難しさを感じた。また、前述したように、硬い動画教材にならないよう心がけたものの実際に完成したものを見てみると、「教材」という硬い概念に捉われている面白味のないものになってしまったと反省した。より自然なスピードで話し、もっと学習者も参加できるクイズなどを設けるべきだったと後悔した。ただ、今回、視聴対象が N3 前後（カイ4-5）ということで、JLPT で検索するだけでなく、実際にフリートークなどで参加した実感から使用する言葉の難易度を柔軟に変えられた点は評価できると振り返る。



(図 11)



(図 12)

だとだんだん飽きてしまう上に、日本語に慣れていない学習者にとって強弱のない話し方は理解が難しくなるため、もっとこれらを意識して話すことができればよかったと思った。加えて性犯罪などの貼り紙に関して男性が被害にあっているイラストを見つけることができず、女性のイラストだけになってしまったこともあまりよくなかったと感じた。こういったことに関する価値観や考え方は国によって大きく差が出ると考えられるため、今回の動画に入れることは難しいが文化の違いについての補足も必要だと考えた。

引用

- (図1)：オリエンテーション時スライド「2024.10月生留学理由の内訳」よりグラフ作成
- (図2)：オリエンテーション時スライド「2024.10月生年齢層の内訳」よりグラフ作成
- (図3)：オリエンテーション時スライド「カリキュラムと時間割・実施体制」
- (図4)：カイ日本語スクールホームページ(<https://www.kaij.jp/ja/courses/general#co-index-5>)
- (図5)：オリエンテーション時スライド「2024.06.25.現在 33 カ国国籍比率」よりグラフ作成
- (図6,7)：唐崎作成動画教材より引用
- (図8,9)：中田作成動画教材より引用
- (図10,11,12)：竹川作成動画教材より引用
- (図13,14)：小林作成動画教材より引用

◆ 新宿日本語学校 ◆

小田琴子

新矢萌香

高岡祥子

千葉幸海

塚田菜都乃

新宿日本語学校 実習報告

k21e1067 新矢 萌香
k21f1014 小田 琴子
k21f2049 塚田 菜都乃
k21g1056 千葉 幸海
k21h2061 高岡 祥子

1. 実習概要

(1) 実習期間

7月4日（木）～8月8日（木）

※実習の開始日・終了日は実習生によって異なる。

※オリエンテーションは6月26日（水）にオンラインで実施。

(2) 内容

事前アンケートをもとに、実習生は初級・中級・上級のいずれかのクラスに割り振られ、担当してくださった教官のもとで、各自実習を行った。主な実習内容としては、担当クラスを含む様々な日本語レベルの授業見学・補佐、担当クラスでの教壇実習、イベントの企画・準備・実施であった。

(3) 新宿日本語学校（SNG）の概要

1975年に設立。約60カ国から約640名の学習者（2024年6月時点）が通っている。新宿日本語学校には3つの校舎があり、高田馬場に位置している。初級～上級日本語のクラスの他に、学習者のニーズに合わせた数多くのクラスが用意されている。独自の教授法である「江副式教授法」の使用は他校との大きな違いであり、また、デジタルコンテンツVLJ とのブレンド型学習を行うことで、学習者はより早く日本語の基礎を学ぶことができる。『最善の努力をして日本語教育を極める』という理念のもと、日本語を教えることのみにとどまらず、日本語文法や漢字教育の研究、日本語教育の解析・分析も行っている。

2. コースについて

※< >は受講するために必要な日本語レベルを示している。

(1) 平日コース

初級基礎から上級まで自分に合ったレベルで学べる平日のコース。大きく分けて一般コース、特進コース、特別クラス、オプションクラスの4つがあり、それぞれ指定される日本語レベルに達していれば、目的に合わせてコースを選択することができる。

[一般コース]

ゆっくり確実に日本語を習得したい人、就職活動や趣味で日本語を学びたい人を対象に、ロールプレイやグループ学習を通じて自然なコミュニケーションができることを目的にしている。目安として3カ月ごとに初級基礎、初級1、初級2、中級基礎、中級1、中級2、上級1、上級2の順で段階的に進めていくシステム。

[特進コース]

日本の大学・大学院・専門学校への進学を目指している学習者を対象に、短時間で日本語の上達することを目的としている。半年で初級から中級にレベルアップし、それ以降は3カ月ごとに上級1、上級2、上級3①、上級3②の順に進めていくシステム。

○初級 <初心者～N5以上>

初級は初級基礎、初級1、初級2、初級特進などのコースに分かれている。ひらがなやカタカナ、教室で使われる言葉なら理解することができるレベルである。重箱カードや文法ノートを使って、挨拶・買い物など日常的に使う簡単な日本語の表現を身に付ける。

○中級 <N4・N3>

中級も初級と同様、中級基礎、中級1、中級2、中級特進に編成されている。初級で学習した文法を活用し、日常生活の会話なら行えるレベルである。オリジナルテキストを使って、自分の意見や考え、経験を話すためのより実践的な表現方法と会話力を得る。

○上級 <N2・N1>

上級には基礎クラスがなく、日本での就職を考えている総合クラスと日本の大学進学を希望している進学コースに3つずつ分かれている。初級・中級で学習したことを基に、日本人とのコミュニケーションが支障なくできるレベルである。評論や経済・政治に関する新聞記事、ドキュメンタリーなどのプロジェクトワークを通して、あらゆる場面での日本語の運用力を身に付ける。

[特別クラス]

○ビジネス日本語 <中級2修了者/N2以上>

ロールプレイを通して、ビジネスに必要な50の場面で使われる敬語や、ビジネス文書の書き方、商業・経済の情報を勉強する。学期の終わりには、各グループが企画書を作成し「新商品企画会議」を行う。

○観光ビジネス日本語 <中級1修了者/N3以上>

オリジナルテキストを用いながら、ショッピングやレストラン、ホテルでの会話とマナーを学び、社会見学を通して、通訳ガイドやホテル業界に必要な日本語の運用力を身に付ける。学期の終わりには、魅力のあるツアー企画をパンフレットにして発表する。

○日本語教師養成 <中級2修了者/N1以上>

日本語教師になるために必要な日本語の教授法を身に付ける外国人向けの最上級選択クラス。冬学期しか開講されておらず、前半は言語学や音声学、文字・語彙など理論を学び、後半は江副式教授法を活用しながら実習を行う。

[オプションクラス]

○漢字クラス <初級2以上>

日常生活でよく見かける漢字を中心に漢字の面白さや複雑さを学ぶクラス。非漢字圏の学習者や漢字に対して苦手意識を持っている学習者の視点に立って、分かりやすく解きほぐしながら学べる。

○日本語能力試験対策クラス <N3以上を目指している学習者>

日本語能力試験（JLPT）のレベルに合わせてN1、N2、N3のクラスを開講している。授業は毎週土曜日に行われ、夏学期は読解、秋学期は語彙と文法に焦点を当てている。

○日本語留学試験対策クラス <中級レベル以上>

日本留学試験（EJU）の対策のため、「記述問題対策講座」「数学」「世界と日本」「小論文講座」「物理学・化学・生物学」の5種類のクラスが用意されている。

(2) 短期コース

[サマーコース]

毎年7月または8月に行われている約4週間のコース。午前中に日本語の授業、午後に鎌倉や富士山など歴史的な場所を巡り、日本文化に触れることができる。コース参加時には浴衣が提供されたり、ホームステイやシェアハウスなどの希望に沿った滞在方法を選べたりなど、短期留学の気分で日本を学習することができる。

[短期特別ひらがなカタカナクラス]

日本語を勉強したことがない学習者でも安心して授業に臨めるように、ひらがなとカタカナを集中的に行うクラス。

(3) プライベートレッスン

グループの授業でなく、個人が1時間単位で受けることができる授業。昼間や夜間のクラスでは時間が合わない学習者、1対1の授業を希望する学習者を対象にしている。

(4) オンラインクラス

初級・中級・上級クラス、ビジネスクラス、JLPT対策クラスをオンラインで受講することができる。学習者の希望の学習方法や予算、時間に合わせて、グループレッスンかプライベートレッスンを選ぶことができる。

[オンラインJLPT対策クラス] <N2・N3以上>

日本語能力試験に合格するために必要な力を計30時間かけて集中的に身に付ける。漢字、文法、語彙、聴解力に特化しており、その他にも試験を受けるときに気をつけるべきポイントを学ぶ。

※日本語レベルが分からない学習者に向けて「プレースメントテスト」を行っている。そのテスト結果によって、学校側が最適なクラスを提案する。だが、初級基礎レベルのコースには、試験を受けずに入学することもできる。

※この他に、課外実習や発表会、進学相談や進学希望者の研究計画書の指導、就職に関するサポートなどを積極的に行っている。

3. 江副式教授法・教材

(1) 江副式教授法について

江副式教授法は、新宿日本語学校で主に活用されており、初めて日本語を学ぶ学習者が素早く効率的に日本語を習得できるとされている教授法である。この教授法は、主に留学生の教育に使用されているが、外国人に対する日本語教育のみならず、日本人に対する国語教育にもいかされると、注目を集めている。特に、ろう学校ではその有効性が認められ、一部の学校で取り入れられ始めている。

江副文法では、日本語を「情報」と「述部」に分け、その間に2列の助詞があるとされている。(図1参照)

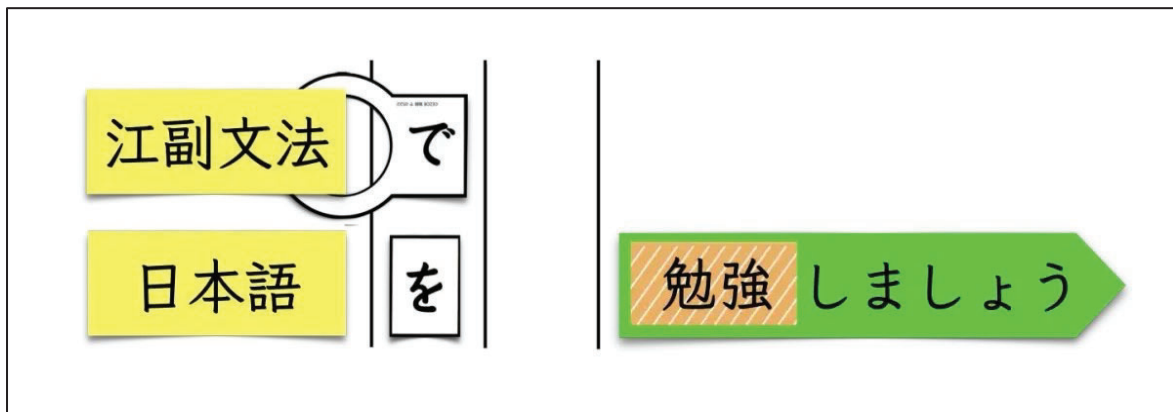


図1. 江副文法に基づく文法の並べ方
(出典：新宿日本語学校 江副式教授法)

(2) 重箱カード

江副式教授法では、日本語を可視化させた様々なカードを用いている。名詞、動詞、助詞などが可視化できるため、パズルのように組み合わせることで文法を簡単に作ることができる。例えば、名詞グループは黄色、ピンク、オレンジ、動詞グループは緑、形容詞グループは青、副詞グループはグレーとなっており、それぞれカードの形が異なる(図2参照)。

動詞グループ		名詞グループ		副詞グループ	
動詞		なにでの形容名詞		副詞	
する名詞		名詞		する副詞	
形容詞		時数詞		呼応の副詞	
文末表現		する名詞			

図2. 重箱カード
(出典：新宿日本語学校 江副式教授法)

(3) 身体的説明

江副式教授法では、動詞を導入する際に、「動詞カード」や「する名詞カード」とともに身体を使用する。「食べる」という動詞を例にした場合、図3の①のように手を前に出すと現在形になり「食べます」を導入できる。②のように前に出した手を横に振ると否定形になり「食べません」を導入できる。③のように手を頭の後ろにすると過去形になり「食べました」を導入できる。④のように腰の位置で手を後ろに振ると過去形の否定になり「食べませんでした」を導入できる。「食べましょう」は、⑤のように両手を自分に向けると可能形の「ましょう」、⑥のように両手を相手に向けると指示をする「ましょう」、⑦のように両手を上にあげると一緒に行動をする「ましょう」が導入できる。



図3. 身体的説明の例

4. 企画イベントについて

(1) 概要

実習期間に、1時間～2時間ほどのイベントを実習生で企画・実施するという活動を行った。イベントの概要は以下に記載する。

- 日時：7月24日（水）15：00～16：30
7月25日（木）9：30～11：00

※両日ともイベントは同じ内容。

7月24日（水）は、小田・新矢・千葉が担当、7月25日（木）は高岡・塚田が担当。

- テーマ：「夏祭り」
- 内容：日本の遊びを体験してもらう
- 対象者：イベント前の予想→25名程度の初級～上級学習者

イベント当日の参加者→全体で41名が参加、初級～上級の学習者が参加

※2日目は、数クラスの学習者が授業途中で先生と一緒にイベントに参加してくれた。

上記のイベント参加者人数は、その参加者も含む。

- ・目的：日本の遊びを体験し、知ってもらうこと。
遊びを通して日本の大学生と会話することで、より多くの日本語表現に触れてもらうこと。
- ・準備したもの：夏祭り紹介のスライド、3つの遊びに使用する道具、参加記念品
※下記の（3）に詳細を記載

(2) ポスター



左図のポスターは、新宿日本語が使用しているGoogleクラスルームにて配信していただき、また各校舎の掲示板にも掲載した。

(3) イベントの準備

○福笑い

→顔は、「おかめ」、「ひょっとこ」、「マリオ」の3種類を用意し、顔の輪郭とパーツをそれぞれ印刷して準備した。

○輪投げ

→輪投げの的はペットボトルを使用し、難易度別にペットボトルに10点、50点、100点の点数を書いた。輪は新聞紙を使い作成した。

○的当て

→段ボールを使用し、的にする部分を切り抜いて、その他の余白部分には、夏祭りに関連するイラストを飾り付けた。ボールは、人や物にあたって安全なゴム製のボールを使用した。

○参加記念品

→全参加者への記念品として、おりがみで「祭りうちわ」を作成した。また、輪投げ・的当てに関しては、1位～3位の参加者に、おりがみで「こま」を作成し、贈呈した。

(4) イベントの目的と工夫した点

イベントの企画では、「日本の文化を体験できる活動」、「参加者同士でコミュニケーションが多くとれる活動」、「初級から上級の日本語学習者全員が楽しめる活動」の3つを実現できる内容を意識して考えた。イベントの実施は7月下旬であったため、夏に関連した活動にしたいと考え、「夏祭り」として日本の遊びを体験してもらう活動を実施した。

イベント開催にあたって、参加人数と参加者の日本語学習状況を事前に知るため、Googleフォームでアンケートを作成し、参加希望者に回答してもらった。また、当日の参加人数が明確に予想できなかったため、ルールが簡単であり、人数調整が柔軟に行える遊びを取り入れ、「福笑い」、「輪投げ」、「的当て」に決定した。遊びのルール説明は、イベントの最初にパワーポイントを使用し紹介した。その際に、イラストや例を多く用いながら簡潔に伝えられるよう工夫した。

(5) イベントを実施した感想

遊び①：福笑い

ルールを説明した時に、遊びの中で使用する指示のことば（うえ、した、みぎ、ひだり、ななめ）を紹介し、参加者同士で活発なコミュニケーションがとれるように工夫した。遊び体験中は、多くの参加者が会話し、時々ジェスチャーを用いながら楽しんでいる様子が見受けられた。しかし、福笑いのルールを理解していない参加者が数名いたため、事前の説明で例を多く取り入れて紹介する必要があると感じた。

ある参加者が顔のパーツを上下反対に置いていた時、指示を出す側の参加者に、上下反対を正しい向きにするように伝えるにはどのように言えばよいのか質問された。「右に回して下さい。」「右回りに回します。」といった返答を行い、理解してもらえた。この経験から、分からない表現を質問されたときには、やさしい日本語で複数の言い換えを用いながら説明することが必要であると実感した。

遊び②：輪投げ

輪投げはルールがシンプルで分かりやすいため、誤解なく参加者に遊び方を理解してもらうことができ、ルール面で問題なく進行することができた。当日は、参加人数が想定より増えたが、投げる回数とポイントのつけ方を変えて、臨機応変に工夫したことで活動時間に影響することなく対応できた。

順位決めの際に、1周目で決定しないことがあった。想定していないことであったが、その場でメンバーと話し合い、2、3周目を行って順位を決めることができた。その際に、ポイントの読み上げや周りの参加者への明るい声かけを行ったことで、会場を盛り上げることができた。

遊び③：的当て

輪投げと同様に、的当てでもルールがシンプルで分かりやすいため、誤解なく参加者に遊び方を理解してもらうことができ、ルール面で問題なく進行することができた。遊び体験中は、参加者同士で投げる位置について、「上!」「下!」などと会話しながら楽しんでいる様子が見受けられ、大変嬉しかった。

上位の順位決めの際に、1周目では決定しなかったため、2、3周目を行って順位決めをした。その際にも、メンバーが明るく声かけをして、参加者も会場を盛り上げてくれたため、あたたか

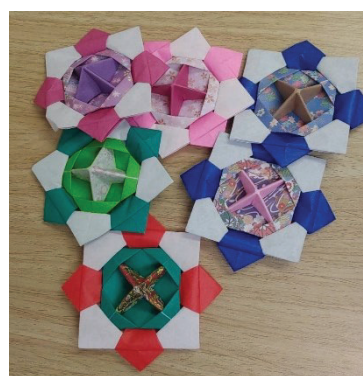
い雰囲気イベントを終えることができ、活動の雰囲気を作り上げることの重要性を学ぶことができた。



上記の図は各遊び（左図から順に、福笑い、輪投げ、的当て）の体験の様子である。実習生撮影

参加記念品に関して

事前アンケートの参加者数を参考にしつつ、参加記念品の「祭りうちわ」と1位～3位の賞品である「こま」を作成した。当日、記念品を渡した際に、「きれい!」、「かわいい!」といった感想をもらい、参加者が嬉しそうな表情をしていたため、記念に残る手作りのプレゼントできてよかったと感じた。



参加記念品の祭りうちわ（左図）、こま（右図） 実習生撮影

5. 実習内容（全体）

(1) 概要

約1か月の実習期間の中で、40時間（スケジュール調整により、場合によっては40.5時間の実習生もいた）の実習を行った。この期間は、実習生1名につき、1名の担当教官についていただいた。新宿日本語学校へ登校する日は9日間もしくは10日間で、具体的な実習内容及び回数は、授業見学（担当教官の授業）が3回、授業見学（担当教官が担当するクラスのレベルとは異なるクラス）が2回、教案指導2回、教壇実習1回、イベント準備1回、イベント実施1回であった。

※実習生と実習機関のスケジュール調整により、1日を通して午前・午後のクラスでの実習があったこと、授業見学回数が1回少ないことなど、各自のスケジュールは若干異なる。

(2) 実習内容

オリエンテーションの際に説明いただいた内容は以下の通りである。

①授業補佐

- ・授業前：教室設営、教具等準備
- ・授業中：授業一部担当、ボードへの板書、ボード消し、会話練習、学習者のフォロー、会話練習パートナー
- ・授業後：教具等片付け
- ・その他：宿題やテストの添削
- ・教壇実習：1コマ(45分)を担当、日程は各自担当教官と相談して決定

②教務補佐

- ・教務室の掃除片付け
- ・教材教具作成
- ・その他付随する業務

※②教務補佐に関して、校舎によって職員室の清掃やゴミ回収等を行う場合もある。また、その他付随する業務については、実習中が七夕の季節であったため、短冊作りと短冊に記載された学習者の願い事をExcelにまとめる作業を実習生が行った。

③イベント企画実行

2つのグループに分かれ、実習生全員が各自参加できる日に実施

- ・7月24日（水） 15：00～16：30
- ・7月25日（木） 9：30～11：00

(3) 授業時間

	午前	午後
1時間目	9:10~9:55	13:30~14:15
2時間目	10:05~10:50	14:25~15:10
3時間目	11:00~11:45	15:20~16:05
4時間目	11:55~12:40	16:15~17:00

例として、午後のクラスを担当した日の1日のスケジュールは以下の通りである。

時間	内容
13:00	教員室にて挨拶
13:00~13:30	清掃、クラスの準備
13:30~17:00	授業見学/授業補佐
17:00~17:10	片付け
17:10~17:30	宿題の添削

6. 実習内容（個人）

<小田 琴子>

(1) 担当クラスの日本語学習レベル：初級2（特進）

N5合格レベル(基本的な日本語をある程度理解することが出来る)。特進クラスであるため、進学目的や、短期間で日本語を学習したいと考えている学習者が対象となっている。

(2) クラスの様子

人数は 17人程で、多国籍のクラスであった。特進クラスで進学を目的とする学習者が多いためか、クラスの雰囲気としては落ち着いていて、真面目に授業に取り組んでいる学習者が多い印象を受けた。導入の際には、先生からの問いに対するリアクションも大きく、学習者全員が楽しそうな表情で説明を聞いていた。また、不明点はすぐに先生に質問、もしくは隣に座る学習者に質問して解決し合ったり、先生からの問いに上手く答えられない学習者がいれば周りがフォローしてあげたりしていた。ペアワークの時間には、出来るだけ日本語を使って話を広げていた。

(3) クラスの活動

主にスライドを使って授業が行われる。1日に4コマの授業があり、前回習った漢字の復習(フラッシュカード)・漢字テスト、ディクテーションから始まる。そして新しい語彙や表現、文法を学び、ペアワークなどでアウトプットをした後、最後に新しい漢字を学ぶ。重箱カードを用いた説明もされる。実習生としては、基本的に出欠確認・フラッシュカードの進行・宿題返却・テストや宿題の添削を行った。

(4) 学んだこと

授業見学や教壇実習に向けた教案作成をする中で、導入を丁寧に行うこと、学習者の立場を意識した授業をすることの重要性を学んだ。

前提として、特進クラスは一般クラスに比べて進みが早い分、短時間の導入で全員が理解出来た状態にした上で、アウトプットの時間を十分に設けながら、学習者の日本語学習に対するモチベーションを維持させていかなければならないだろう。

山口先生は導入において、例えば、「お見舞い」をテーマに「料理を作ってもら」「菓を買ってきてもらう」のように、学習者も容易に想像出来る一連の流れの中から、いくつかの場面を提示していた。そして何度も簡単な質問をしたり、学習者自身のことを問う質問から内容に繋げたりして具体的にイメージさせながら、自然に新しい言葉や表現、文法が使えるように誘導していた。また、抑揚をつけて話すことで重要な部分を印象づけたり、身振りを使って表現したりしていた。このように、そもそもの設定を理解することが難しい初級レベルの学習者を考慮し、かつライブ感のある授業にするなど、様々な工夫と技術によって、限られた時間であっても学習者が抵抗なく楽しみながら授業についていくことができると分かった。

<新矢 萌香>

(1) 担当クラスの日本語学習レベル：中級2

中級2はN3合格に相当するレベルであり、身近なテーマについて自分の意見を述べたり、簡単な説明をしたりすることができる。「話すこと」以外に「聞く・読む・書く・コミュニケーションをとること」に焦点を当てて学習しており、5技能をバランスよく運用する力を身に付けることを目指している。

(2) クラスの様子

全体で21人程であり、イタリアやロシア、ポルトガル、タイなど様々な国籍の学習者で構成されている。グループワークや発表では、日本語を積極的に使う姿が見られたが、日本語での言い方が分からなかったときや不明点があったときは、授業内でも母語または共通の言語を話せる学習者同士で確認し合っている様子が見られた。また「これは何と言いますか？」という藤川先生の問いかけに対して多くの学習者が反応し、中級1までに習得した語彙と文法を使って説明しようという一生懸命な気持ちが強く伝わってきたクラスだった。

(3) クラスの活動

- ・使用教材：新実用日本語 中級Ⅱ（新宿日本語学校のオリジナルテキスト）ルビ付き
 - 第1課：異文化<文化の違いを感じたことはありますか？>
 - 第2課：知る<日本のことをどれくらい知っていますか？>など
- 学習者が持つ日本のイメージや知識をそれぞれの視点から共有し合えるテーマが多い。

- ・主に以下の活動が行われた。

①スピーチ

(例) 私がおすすめる東京の場所／生活の中で撮影した写真を紹介しよう など

テーマに沿って約1分30秒の内容を発表する。発表用の原稿は下書き程度で準備し、先生が添削する機会は作っていない。発表時に間違っ話してしまっても、どれだけ自分の言葉で伝えられているかを評価しているからである。学習者の発表後、藤川先生は発表内容に対するコメント

やフィードバックを行い、他の学習者がはじめて知る言葉や情報があれば写真を見せるなどして全体で共有している。

②漢字

テキストに記載されている漢字の読みと意味の確認、その漢字を使った新出語彙を例文と交えながら覚える。後日、学習者の理解度を測るために漢字の小テストを行っている。

③オリジナルテキストを使用した学習

テーマに沿って書かれた600文字程度の文を読み、そこに出てくる新出語彙や表現、文法を確認したり、問題を解いたりすることで学習者の内容理解を深めている。新出表現の学習では、先生がいくつかの例文を提示した後、学習者がアイデアを絞ってその表現を使った例文を自力で作るという作業も行っている。

④『日本のことを1分間英語で話してみる』（KADOKAWA）を使用した学習

（例）武士／御朱印／コスプレ など

この教材は外国人が知りたい日本の文化や暮らしについてまとめられており、本文とCDの音声は全て英語で記載されている。だが、内容理解の確認を行う問題は日本語で書かれており、学習者は英語の語彙を日本語に訳しながら空欄になっている箇所を埋めていく。

（4）学んだこと

担当教官の言動を観察していく中で、1つ1つの発言や行動に意図が必ずあることを知ることができた。例えば、読み方の確認を行う場面では藤川先生が読んだ後に学習者が読み、それを1人の学習者が1文ずつ読むということを繰り返して行っていた。これは、学習者がなんとなく読んでいるかではなく、きちんと理解して読んでいるかを知るために工夫したことだと感じた。中級クラスは覚えなければいけない文法や語彙、表現が他のレベルのクラスよりも比較的多く、1日で進む授業のスピードも早い。また、新しい知識を先生から伝える場面が多いゆえに、どうしても学習者が対話する時間が少なくなってしまう。だからこそ、このように学習者個人の理解度を把握する場면을意識的に設けることは大切なのである。

もう1つ学んだことは、学習者の日本語を訂正するときの伝え方である。私の担当クラスでは、学習者が例文を作成して発表する機会が多くあった。その中で、例文を作るのが得意としている学習者とそうではない学習者の差は大きく出てしまう。そして、得意としない学習者にとっては「間違っている」ということが自信を失くしてしまう原因になってしまうのである。正しい日本語としての明確な境界線はないからこそ、間違いを指摘するときは「そこが違う」ではなく「どう違うか」そして「どうして違うか」に重点をおいて伝えることが大事だと学んだ。そのためには、先生自身が様々な違いに敏感であり、学習者の立場に立って説明できる状態であり続けることが求められると気づくことができた。

<高岡 様子>

（1）担当クラスの日本語学習レベル：初級基礎

簡単な自己紹介や、ひらがなを書いたり読んだりすることができる。しかし、文字を並べ替えること、耳で聞いた単語を書くこと、会話をするのは難しい。

(2) クラスの様子

担当クラスの人数は計10名で、中国、台湾、香港、メキシコ、スペイン、ドイツの出身者であった。ビザの関係で実習中に帰国をした学習者が4名いた。日本に来たばかりの人が多く、日本語を理解している学習者はほとんどいなかった。新しく学習する単語や文法を導入する際に、英語を交えることもあった。また、学習者同士の会話も英語や中国語で行われていた。

(3) クラスの活動

1時間目は、前回のクラスの復習として、主に文法や単語の確認を行っていた。重箱カードや身体的説明を取り入れることで視覚的に理解できるため、ほとんどの学習者が発言していた。2時間目と3時間目は、新しい単語や文法の学習を行っていた。同様に重箱カードや身体的説明を取り入れており、ほとんどの学習者はスムーズに回答できていた。4時間目は、ひらがな、カタカナ、漢字を書く練習を行っていた。何度でも書けるように、学習者ひとりひとりにホワイトボードとペンが配られていた。特にとめ、はね、はらいは厳しく指導していた。

(4) 学んだこと

私が教壇実習や授業見学を通して学んだことは、主に2つある。

第一に、「事前準備は徹底的に行うこと」である。教壇実習の際、学習者から「しましょ」と「してください」の違いを問われ、同じだと回答してしまった。教壇後、担当教官の三橋先生に相談をすると、「しましょ」は目上の人をお願いをする際に使用され、「してください」は年齢を問わず指示する際に使用されるのではないかと述べられ、納得した。この経験から、適当な回答が学習者に間違った情報を与えてしまう重みを実感した。三橋先生は学習者の全ての質問に納得のいく回答をしていた。事前準備はどのくらい徹底的に行うのか尋ねたところ、教材に載っている単語、写真は全て質問されることを想定して準備しているとのことだった。

第二に、「教師も学習者もお互い楽しみながら学ぶこと」である。私は3名の担当教官の授業を見学したが、笑顔が多いクラスほど学習者の日本語の発話量が多く、集中力が高いと感じた。日本語教育だけでなく、どの教育現場でも楽しい教室は学習者の学習意欲に影響を及ぼすと考えている。

今後教員になった際は、事前準備を徹底して行い、学習者と楽しみながら学び合う日本語教室を実現させたい。

<千葉 幸海>

(1) 担当クラスの日本語学習レベル：上級1

N2合格相当レベルであり、新聞を含む様々な文章の内容を読み取ることができ、身近な社会の問題についても話し合いができる。担当したクラスの学習者の希望進路は、進学・就職・帰国など多様である。

(2) クラスの様子

クラス的人数は17名で、学習者は、アメリカ、フランス、イタリア、ロシア、カザフスタン、中国、フィリピン、ベトナム、ミャンマーの出身者であった。授業中は、発言やグループでの話し合いを積極的に行う学習者が多く、明るく真面目に学習していた。

(3) クラスの活動

1時間目の最初に、1分間スピーチと質疑応答を行っていた。そして、N1の漢字を10個程度学習し、その後の授業内容に取り組んでいた。内容は、日によって異なるが、伝聞・引用などの文法学習や読解問題、「電話をするとき」や「交通情報を読み取る時」に使用する表現の学習など幅広い日本語表現を学ぶ授業であった。また、語彙表現を学んだ上でのロールプレイ学習、リード文などの要点を短くまとめる練習などに取り組んでいた。実習生としては、学習者の点呼、小テストや宿題の配布・回収、小テストの採点、会話練習のサポート、学習者が発表した意見の板書、学習者からの質問対応などを行った。

(4) 学んだこと

実習で学んだことの1つは、学習者との対話を多く取り入れることである。見学した授業では、教師と学習者の対話する機会が多く設けられており、グループワークの時間には教師が各グループを巡回して、学習者との意見交換を頻繁に行っていた。授業見学での学びを活かして、教壇実習では、対話を多く取り入れられるように教案を作成した。実践を経て、学習者との対話時間を設ける部分では、教師が学習者の意見を聞き出して内容を深められるように授業を進めること、常に学習者に視線を向けて様子に注目することが重要であると学んだ。

授業内容において学んだことは、ことばを説明するとき、辞書的な意味の説明だけではなく、必要に応じてイラストや具体例を用いて紹介していたことである。上級で学ぶことばや話題は説明が難しい内容も多くあったが、適宜イラストや具体例を用いて、実際に学習者からも経験や考えを聞き出し、様々な国や文化を背景にもつ学習者の状況も踏まえて、しっかりと全員で理解できるように授業が進められていた。そして、学習内容に補足情報を加えて紹介していたことも多く、学習者の身近な話題と絡めて学習できるように工夫されていることも学んだ。

<塚田 菜都乃>

(1) 担当クラスの日本語学習レベル：初級基礎

ひらがな・カタカナは読めるが、音声を聞いて単語を書くことは難しいレベル。簡単な日本語をゆっくり話せば理解でき、簡単な自己紹介も行える。

(2) クラスの様子

クラスの人数は9名で、アメリカ、カザフスタン、コロンビア、ブラジル、中国、タイ、台湾の学習者が在籍していた。授業外での会話は母語で、授業内になると日本語を一生懸命用いていた。しかし、分からないことがあると授業内でも学習者同士、母語で質問し合う姿も見られた。

(3) クラスの活動

授業は主に、ディクテーション、復習、新しい内容が行われた。ディクテーションでは、前回までに学習したひらがなカタカナを用いた単語を教師が発音する形式であった。授業内でひらがなカタカナを読めたり書けたりしている学習者も、音と文字を合わせることは少し難しい様子であった。また、復習や新しい内容の学習の際には、積極的に発言する学習者が多く活発なクラス

活動が行えていた。新しい内容を学習する際、学習者がつまづく場面が多々あるため、実習生としてフォローに入り、一緒に悩みを解決することに注力した。

(4) 学んだこと

初級基礎クラスでは、新宿日本語学校の特徴である授業法を中心に構成されており、当初は私自身覚えることも多く大変であったが、何度も授業を見学させていただく中で、学習者と同様に学びながら自然に覚えていくことができた。また授業について、発話やコミュニケーションを特に重要視しており、ただ教師が説明するという時間は少なく、学習者を頻繁に指名し発言してもらう時間が多かった。一人ひとり発話してもらうことで、誰が理解していないのかということ判断することができたり、常に授業に集中して取り組んでもらえたりするメリットがあると感じた。また、学習者からの質問は時折鋭く、何気なく日本語を使用していると気が付かない点を指摘される場面もあった。「正しい日本語とは何か」というのを常に考えながら、学習者と一緒に再度日本語を学んでいく姿勢を持つことで、より学習者に寄り添った教師になることができ且つ、分かりやすい授業展開を行えると感じた。

◆実習を振り返って◆

個人レポート概要

フィールド実践を行うに際して、学生は個々の目標を設定し、実践期間中に振り返りのためのデータを収集した。実習終了後、各自の目標に照らしてフィールド実践がどうであったかをデータの分析をふまえて振り返り、レポートにまとめた。

レポートのタイトルと概要は以下のとおりである。

【学内実習:フィールド実践 A】

牛タン

● 内田閑「学習者が楽しめる授業とは」

私は個人目標として、全ての学習者にとってわかりやすい授業を行い、楽しみながら多くの学習をしてもらうことを掲げて授業を行った。そのため、学習者に楽しんでもらえるような体験を多く取り入れることを心がけた。また、学習者だけでなく私たちも一緒に制作や体験に参加することで、学習者と教える側という垣根を無くし、皆が楽しんでいる雰囲気を作るようにした。さらに、私たちから質問を投げかけるだけでなく、学習者同士や学習者から私たちへ質問する機会を作ることで、学習者の発話機会が増え、日本語を話すことの楽しさを実感してもらった。錯覚というテーマであったため、錯覚の概念をわかりやすく伝えることに苦戦したが、説明ばかりにならないよう、イラストを使用したり工作を取り入れたりするなど、楽しみながら錯覚を知ってもらえるよう工夫して授業を行った。

● 佐野茉莉香「上級レベルの日本語学習者のための授業設計」

私は、本レポートにおいて「上級レベルの日本語学習者のための授業設計」というテーマを設定した本レポートの目的は、私の実習での経験に基づき、上級レベルの日本語学習者にとっての授業はどのようなものが適しているのかについての見解を述べることである。この目的の達成のため、二つの観点と実際の授業の活動例を挙げた。具体的には、「授業設計の際、進行台本を作るなどして細かいところまで考えすぎず、学習者に合わせて柔軟に対応する」ということと、「学習者が話した言葉や書いたものを細かいところまで確認して指摘する」という二つの観点が重要であると考えた。また、上級レベルに適した授業について、アイスブレイク～導入～授業の本題に至るまで、実習で行った実際の活動例を基に、それぞれの活動における注意点やポイントを挙げて考察した。最後に、これらの二つの観点と、実際の活動例に基づき、上級レベルの日本語学習者に適した授業設計についての見解について述べた。

● 篠原佑舞「双方向授業をつくるために必要なこと」

学内実習を通して、私は双方向授業を作る難しさを実感した。ただ学習者の発言機会を多く作るだけでは不十分で、学習者も授業を作るメンバーも発言をしたい、そう思える授業こそが本当の双方向授業であると分かった。実習をする中で双方向授業のために大事なことは、しっかりと

した準備だけではない。はじめは学習者からの積極的な発話を求めて系統的に発言を促したが、ただ質問の応答となりなかなか想定通りにいかなかった。しかし、実習中に気づいたことを大切にして学習者と密にコミュニケーションをとったり、学習者の好きな物の話を振ることを意識することで学習者とメンバーの間で関係を構築することができ、「学習者とメンバー」という関係性ではなく、「仲間」と表現できるような関係性になれたと思う。そのおかげで想像するような会話が飛び交う双方向の授業を作り上げることが出来たといえるだろう。

● 竹内美玖「学習者のニーズと教師の狙い」

実習全体を振り返り、このメンバーであったから最後まで笑顔で終われる実習であったと振り返る。困難から始まった私たちのグループであったが、苦労したぶん成長した機会であり、メンバーと協力して行う大切さや多くの人に支えられているという有難さに改めて気が付くことができた。計画している際は学習者の目線に立ちながら、計画を行うことの大切さを学び、実行したが、柔軟に考えることができない場面にぶつかってしまうこともあった。しかし、何を目標や目的として本実習に参加してくださったのか知ること、スピード感のある実習の中で日に日に内容の濃い活動が行うことができたと思う。興味のあるものから導入していくことで発言量が増えることを体感し、学習者のニーズに近づけたようで嬉しかった。1 から企画するため自己目線に陥りがちであるが協働学習の中で助け合いつつ客観的視点を持ち向き合っていく大切さを学べた。

● 福本乃愛「学習者の満足度について」

私は学内実習で「学習者との会話を大切にし、満足度が高い実習にする。チームメンバーと協力し合い、学習者に楽しんでもらえるよう、自分たちがまず楽しむ。レベルに合わせて、誰一人授業で置いていかれないようにする。」という三つの目標のもと、学習者と深い学びを得ることができた。Google form を集めた結果、授業で置いていかれている学習者はいなかった。また、全員が楽しかったと回答しており、満足度は高かったと思う。このチームでは、臨機応変という言葉がキーワードなのではないかと思う。大幅な人数変動や、学習者の日本語レベルに応じて教案の変更などさまざまな変更を繰り返した。また、牛タンチームは、なかなか学習者が集まらなかった。しかし、この牛タンチームのメンバーだったからこそ一人一人の役割を全うし、成功させることができたと考える。

てんぷらうどん

● 菊川涼佳「学習者にとって学びのある活動とは」

今回の実習を通して、学習者にとって学びのある活動にするためにはコミュニケーションを通して、学習者に日本人とリアルな日本語を話す導線を作る必要があることに気付いた。また、実際に学習者が体験したことを活動に活かして、段階的な学びにしていくことで、考えやすく、言語化する際も分かりやすくなり、自発的な学びとなることを知った。さらに、学習者も活動を作る一員として、活動できるように、言われたことを鵜呑みにしてできるのではなく、自分の弱点を理解でき、それが補えているかどうかを意識的に確かめられる活動が重要であり、一方的に教えるのではなく、学習者が求めているコミュニケーションを実習生が作っていく必要があるだろう。

● 種本葉「学び合いの場を生み出すためには」

私は今回の実習で「双方間の学び合いを念頭に置き、クラスの雰囲気作りに徹底する」「自身も楽しみながら、学習者の視点・存在を忘れない」という2つの目標を設定して挑んだ。これらを踏まえ、今回の実習を通して、日本語教員と学習者の良好な関係の構築が教室運営に大きな影響を与えるということを知った。学習者のニーズやパーソナリティを知り、吸収することで、能動的に学びたいと思える教室運営に繋がるのではないだろうか。また、学習者の存在あってこそこのクラスであり、日本語教員は常に相手の目線に立って、何が求められているのかを柔軟に対応する必要があると感じた。これらより学び合いの場を生み出すためには、学習者に寄り添い、言葉に留まらないコミュニケーションを行うことが重要だと考察する。

● 藤原小百合「実習を通して考えた『本当の双方向学習』と『全員で教室を作り上げる方法』」

学内実習は「本当の双方向学習」と「全員で教室を作り上げる方法」は何かを毎日考える場であった。私たち実習生と学習者間の会話は生まれても学習者同士のそれは自然には生まれないという課題に悩まされたが、同じグループ内になった人同士で「何が好きですか？〇〇さんに聞きます」など実習生から始め、自然と学習者同士でも名前を呼び合い質問し合うよう働きかけることで改善できると学んだ。学習者間の自然な発話は、学習を促す点、教室の和やかな雰囲気づくりの点においても有効で必要であると気づき、その良い方法を考え実行することは日本語教育をやるうえでの永遠の課題になりうるものであると気づいた。それらの課題が生まれる毎日、考えることは尽きず、未完成のまま実習に臨んだ日もあった。不完全で机上の空論だった教案だったが、学習者の方が参加して発言してくださったことで完成した。教室とはまさに、学習者の方と一緒に作り上げていくものであると学んだ。

● 松本夏実「主体的な双方向コミュニケーションの実現のために」

筆者の実習における目標は「主体的、かつ実習者と学習者の双方向のコミュニケーションをする」とした。この観点で各日の実習を振り返り、その中で得られた気づきとして2点ある。1点

目は学習者からの自発的な発言を受け取るために「待つ」ことである。2点目は想定外の事態を様々に想定し、何か起きても冷静に対応することである。準備の段階では学習者が楽しい活動することを考えていたが、実習では進行を意識することと学習者とのコミュニケーションの両立ができていなかったと分かった。実習生と学習者の双方が伝えたいことを伝えられる環境を作る観点に気付いた。筆者は、主体的な双方向のコミュニケーションは発話者の意思を尊重することでもあったため、一方的ではなく、相互に伝え合えるコミュニケーションの必要性を、今回の日本語教育実習で学ぶことができた。

● 松本まりな「学習者との関係構築に有効となる手段の考察」

実習を終えて、執筆中の現在も実習生や参加者と親密な関係を築くことができている。本経験より、本実習における参加者との関係の築き方に関心が残った。そこで、いかなる要素・行動が日本語学習者との親密な関係構築に有効であったかを個人レポートにて考察した。実習中の関係構築の要因として①学習者ニーズに対応した教案作成、②実習生の姿勢、③話題の印象付け方という3点に注目した。①については、生の日本語に触れたいというニーズに応じて実習生と関わる機会を増やした結果、互いに個人的な会話が増え、関係構築に好影響を与えたと記述した。②については、特定の話題について学び合う関係を構築しようとする実習生の姿勢が、親密な関係構築に影響したと述べた。③については、実習中に自身に関する情報量を減らすことで、参加者に自分自身が印象付くよう工夫したことが、参加者の方との関係構築に有効であったと考察した。

● 李韶敏「学習者と実習生という枠を超えた関係性を構築するために重要な実習生の姿勢とは」

私は現在、学習者の皆さんそして共にこの実習を準備から終了まで走り抜いた実習生と月に5回以上交流する程仲の良い関係性を構築し、生きるための価値観やプライベート、他ではなかなか話せないようなことも共有できるソウルメイトたちを得たと実感している。この関係性を築くことができたのは、自身が5日間の活動にあたって、学習者一人一人に対して「もっと知りたい、仲良くなりたい」という気持ちを持って個人目標を設定し、真剣に向き合って接したからだと考える。その中でも、3つの目標(姿勢)：①学習者と仲良くなる ②取り残されたと感じる学習者を作らない環境づくり③実習を楽しむ が現在の「学習者と実習生という枠を超えた関係性」を構築する上で重要な役割を果たしていたと感じている。

【学外実習:フィールド実践 B・C】

インターカルト日本語学校

● 秋吉里保「日本語教育現場における多様性—インターカルト日本語学校の視点から—」

教育実習を通じて、日本語学校における学習者の多様さや、そこに対応するような先生方の授業とそれを支える知識・経験の多様さを学ぶことができたと考えている。インターカルト日本語学校における日本語教育の現場においては、ただ学習者に対して日本語の文法を教えるのではなく、「求められていることは何か」「なぜ、それが必要なのか」を意識した上で、教案作成や授業が行われていた。そして、先生自身が日本語教育の現場における多様性を楽しみ、日々自身でも学ぶとともに学習者から得られる学びを大切にしていた。そのような現場であるからこそ、先生から学習者への一方的な矢印ではなく、先生と学習者双方に向かう矢印が形成され、学習者が求める日本語教育が受けられる環境が整えられるようになっていないのかと考えている。そして、自身も、個々の学習者が持つ背景を大切にしながら双方向に矢印が向くコミュニケーションを意識するきっかけを得ることができたと考えている。

● 黒沼美優「人との関わりの中で得た気づき」

実習期間中は学習者、日本語教師の方々、インターカルト日本語学校で実習をした同じグループのメンバーなど様々な人と関わった。2週間という短い時間ではあったが多様な生き方や考え方に触れることで、多くの刺激を受けた。そして自分のこれまでの行動を振り返り、将来について考えるきっかけになった。今回の実習では私自身が他者から多くのことを教えてもらい、モチベーションやエネルギーを与えてもらう立場になってしまった。今後は自分自身も他者に教えたり影響を与えたりできるような存在になるために、チャンスをも自分できちんとつくり出して、そのチャンスを逃さず掴んでいき、多くの経験を積んで成長していきたい。

● 新屋舞衣子「新たな自分に出会う日本語教育」

私は、実習に二つの目標を立てて臨んだ。一つは教壇実習に向けて全員が参加意識を持てる授業を作ること、もう一つは授業内外で学習者と積極的にコミュニケーションを取ることである。教壇実習では、学習者と双方向のやりとりを行うことを特に意識した。また、授業外の時間も自分から学習者に話しかけ、信頼関係を築く努力をした。インターカルト日本語学校は、学習者が互いの文化を肯定し、尊重し合える環境だった。また、異なる文化的背景を通じて新たな価値観に出会うことのできる場所であり、自らの知見が広がる貴重な学びを得た。先生からのレクチャーも経て、将来的に日本語教育に携わりたいという気持ちがさらに大きくなった。今回の実習、そしてこの養成課程で学んだことを社会に還元できるように、自分自身の価値観をアップデートし続けていきたい。

● 田口華子「実習目標を通して得た学びーコミュニケーションとモチベーションの観点からー」

今回の日本語教育実習では、学習者との交流とモチベーションの向上という2つのテーマを取り上げ、目標を設定した。挨拶から趣味や出身国のことなどについて質問し、学習者に自ら話しかけることで、最終的には学習者の方から積極的に話しかけられるようになった。また、どのような瞬間にクラスが盛り上がるのかということに注目して授業見学を行った。実習を通して、相手に興味を持つ姿勢の重要性を実感した。学習者について関心を持ち、話が弾むように心がけることで、話しかけやすい雰囲気を作ることが出来た。また、休憩時間に話しかけることで英語や母国語の使用機会を減らし、日本語の発話量を増やすことにつながった。加えて、クラスの様子から対戦形式のゲームや「使える」という感覚が持てるようなワークを行っている時に、クラスが盛り上がっていた。「話す」・「書く」の技能を中心にゲームやワークを行うと学習意欲の向上に効果的であると学んだ。今後日本語学習者と関わる中で、これらの気づきを心がけたいと考える。

● 中野真帆「学習者とのコミュニケーションを生かした授業作り」

今回のインターカルト日本語学校での実習を通して、学習者との日常的なコミュニケーションを生かした授業作りや、学習者の興味や関心を引き出す授業作りの難しさや学習者との関わりを通して、日本語学校の今を学ぶことができた。授業作りについては、学習者と日々コミュニケーションを取り、学習者と信頼関係を構築する大切さや、教案作成において綿密に構成を練ることや想定外の返答があった際にどのように対応するかを考えておく重要さを学んだ。また、学習者の方を未修の文法や語彙を言いたい気持ちにさせることが導入においてとても大切だと学んだ。日本語学校の今については、目的別授業で、自分の関心によって選択できる授業によって、学習者のモチベーションアップにつながるということが印象に残った。また、日本語学校に通っている目的は多様であり、何歳になっても新しいことを始めようとする挑戦心に刺激をもらった。この実習で吸収した多くの学びを糧にして、今後の人生に生かしていきたい。

● 乳井祐香里「学習者との関係構築の重要性」

今回のインターカルト日本語学校での実習では、「学習者の方の気持ちに寄り添った言動を心がけ、教壇実習に活かす」という個人目標を立てた。私が学習者の立場だったらどのように接してほしいか考え、笑顔と積極的なコミュニケーションを意識した。コミュニケーションの積み重ねは、事前準備の学習者が興味を持てるような教案の作成時に活かすことができ、教壇実習当日の協力的な姿勢が緊張していた私には大変心強かった。ここから、「学習者との関係構築」の重要性を学んだ。また、実習では、学習者との接し方以外にも日本語学校の先生方の授業の作り方など学校では学ぶことが出来ない実践の場を経験することができた。特に、これまで日本語学校を訪れた経験が少なかつたため学習者の現場の声を聞いた経験が印象に残っている。今回の実習で感じた課題点を改善できるように、多くの現場に携わり、経験を積み、今後も日本語教育に携わりたい。

カイ日本語スクール

● 唐崎千香子「教室から社会へ」

日本語の指導をするにあたって、学習者が日本語を習得するというだけでなく、日本で生活をしていくために、日本人と円滑なコミュニケーションを行ったり、良好な関係を築いていくことができるようになることを目指すこと、その手助けができるような学習を叶えることが大切であると学ぶことができた。また、様々なバックグラウンドをもつ学習者に対し、個別性と多様性を重視することも重要である。クラス全員が同じ目標を持って同じ道筋で達成をする必要はなく、個々の学習者のレベルや力を見定めるため、まずは日本語教員として観察する力を養うこと、その目標達成のための学習方法や内容の決定権は学生にあることが大前提であるという考え方を基盤に、個々にしっかりと向き合うことが大切である。

● 小林南瑠「日本語教師に必要なコミュニケーション能力とは」

「学習者の間違え方と、それに対する教師の対応を学ぶ」「学習者となるべく多く話す」「レベルごとの授業構成や勉強方法について学ぶ」という三つの目標をもとに行った実習から学び考えたことについて述べる。私は今回の実習を通して、学習者のことを一番に考えたコミュニケーションを行う能力が日本語教師にとって非常に重要であると感じた。これは直接会話をする際に相手に伝えるべきこと・質問すべきことを的確に判断できることに加え、自分がわかりやすいと思うものではなく学習者にとってわかりやすい授業を追求する際にも必要であると考えた。さらに、動画教材作成後にいただいたフィードバックからも、学習者の基準で直接的・間接的なコミュニケーションを行うことの重要性を改めて学ぶことができた。そしてそのためには学習者の目線を理解できる必要があるため、日本語学習に関する知識の習得も必要不可欠であると感じた。

● 竹川奈々「学習者と教師の観点からみる日本語習得課程と日本語教育が果たす役割」

日本語を学ぶ動機や目的が多様化していることによって5技能における得意不得意の差は母語を問わない状況となっている。そういった中で学習者がどのようにして日本語を習得していくのかその過程を分析する。特に分からない単語の言い換えや自主的な発話量に大きな変化がみられる。その習得過程には教師の学習者のエラーに対する指摘方法や発話を促す教授法が大きく影響している。そして刻々と変化するタスクシラバスは生活に即した日本語教育ができる一方で、文法の未習・既習の境が曖昧になるという問題を孕んでいる。世の中には便利な機械があり、日本語を話せなくとも簡単な会話は出来る。しかし、多文化共生社会が求められる今、必ずしも皆が幸せとは限らないだろう。理解できないお互いの文化の妥協点を導き出す上で機械を介さない人と人のコミュニケーションが重要であり、外国人にとっても日本語を話すことは武器になると思案する。そしてその架け橋のような存在を日本語教師・教育は果たす必要があると結論づける。

● 中田有咲「学習者との会話の中で日本語教師ができること」

私は、学習者との会話が良かった実習を通して、「会話」に着目し、日本語教師が学習者とかわ

す会話の中で何ができるのか考察した。まず、学習者の興味を引く話題を提供できるよう、話のネタや知識を得る事である。興味のある話題以外では伝えようとする意欲を失い、話す事に消極的になってしまう学習者には特に、興味を引くネタの提供は重要である。「話したい」と、学習者自身にどれだけ思わせることができるかが、教師に求められる能力ではないか。次に、間違いをはっきり指摘する事が大切である。間違いに気づいているのに指摘できなければ、それは学習者の成長を阻害する事になる。指摘方法も、間違い方や、学習者のレベルに合わせて変えられる事が教師に求められる技だと考える。これらは日本語教師にとって出来て当然の基礎問題ではあるが、こういった基礎がしっかり出来てこそ、学習者にとって実りある会話の時間に出来ると考える。

新宿日本語学校

● 小田琴子「能動的な参加を促す授業のつくり方」

私は、「積極的に学習者とコミュニケーションをとる」「これまでの日本語教室ボランティアでの経験や、実習中の授業見学から得た学びを活かした授業（45分）を行う」という2つを実習の目標とした。その上で、学習者に対して授業に能動的な参加を促すために最も重要なのは、学習者と教師、学習者同士がお互いについて知る機会を設けることだと感じた。それぞれが互いについての理解を深めることで良い関係を築かれ、より活発な授業を行えたり、抵抗なく発言できる環境を作ったりすることができる。また、どの学習者も積極的に参加することを楽しみ、かつ内容にしっかりついていけるように、学習者への発言の求め方を工夫したり、導入を丁寧に組み立てたりすることで、授業のペースが早くても学習者の日本語学習のモチベーションを保つことができると分かった。

● 新矢萌香「日本語教師に求められる3つの要素」

今回、教育実習という機会をいただき、自分の目で見て、自分で行動に移したからこそ、気づけたことはたくさんあった。学習者に積極的に話かけることで、学習者が興味を示す話題や物は何千通りもあることや、担当教官に様々な質問をすることで、学習者との接し方や授業の留意点に特定の答えはないことを知ることができたのもその例の1つだ。私が周囲の空気に呑み込まれやすく、行動に起こすまで時間が掛かってしまうという課題を見つけれられたのも、実際に教育実習に行ったからこそ分かったことである。だからこそ、私には、そのような実践の場での経験がもっと必要なのだと感じた。まだ気づけていない学びを得るためにも、今回の学びを今後に結びつけるためにも、もっと経験を積み、自分が目指す「学習者に寄り添った」日本語教師に近づいていきたいと思った。

● 高岡祥子「発言しやすい環境作りと事前準備の必要性」

私が実習で設定した目標の1つとして、「初級基礎クラスの教案を考えられるようになる」というものがあった。目標を達成させる中で、流れをしっかりと考えて教案を作成することや、学習

者の個性を考慮したり、想定質問を考えたりなど、事前準備を徹底することが大切だと学んだ。また、初級基礎クラスと上級基礎クラスの授業を見学し、相違点と共通点を発見することができた。相違点は、クラス内の学習者の親密さである。これは、それぞれのクラスの日本語レベルが影響していた。学習者と休み時間などに積極的に日本語で会話をし、会話が成立する喜びを沢山経験してもらうことが、日本語教師の役目だと考えた。一方共通点は、どちらのクラスの担当教官も事前準備をしっかり行なっていたことである。教壇実習でも実感したように、想定質問を複数考え、全ての質問に答えられるようにすることが大切である。

● 千葉幸海「対話を深める授業への取り組み」

目標の1つに「学習者との対話を深められるよう行動し、教壇実習では、対話を多く取り入れた授業をデザインして実践する。」ということを設定し、上級クラスで実習を行った。授業見学を通して、教師は、常に学習者の様子に注目し、学習者の発言を十分にくみ取りつつ、対話を深めることが重要であると学んだ。この学びと上記の目標をもとに、教案を作成して教壇実習を行った。教壇実習では、学習者の様子を見ながら、授業内容に対する学習者の意見・体験を聞き出せるように質問し、学習者からの意見に関して、対話を深める時間をしっかりと設けながら進めた。実習を振り返り反省点もあるが、担当教官からいただいたコメントも踏まえ、上記の目標を概ね達成できたと考える。また、日本語教育の現場に関わる上で必要なスキルとして、学習者にとって身近な話題や社会問題を踏まえた情報を教材に取り入れることや、学習者の発言とその場の状況に応じて柔軟に対応できる力を培うことなどを学んだ。

● 塚田菜都乃「わかりやすい、面白い授業とは」

個人目標として、①授業1コマを担当できるようになること②学習者が楽しかった/授業を通して〇〇を覚えたと言ってもらえる授業を組み立てることを目標としていた。3クラスの授業見学を経て、学習者がわかりやすく、今後も覚えられる授業として、共通している点は2点あり、1つ目が学習者が考える時間を設けること。2つ目が、飽きさせない授業を組み立てること。であると考えた。1つ目に関して、どのレベルのクラスでも、必ず学習者が考える時間を設けており、考えたうえでわからないことを教師に質問することでさらなる理解向上へと繋げていると感じた。2つ目に関して、教師による日本語音声のみならず、様々な日本語に触れることで飽きない授業が組み立てられていると感じた。また、これらの共通点を基に、自身の教壇実習では、学習者の考える時間を十分に設けた授業の他、目を引くポイントとしてぬいぐるみを使用した授業を行い、わかりやすく且つ面白い授業を行った。しかし、時間配分の点では改善の余地があると考えているため今後の課題としている。

2024 年度 日本語教育実習報告書

2025 年 2 月 1 日発行

編集 東京女子大学 日本語教員養成課程

〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1

実習担当者 松尾 慎・吉本 恵子